

●国際連合大学 2016-2017 年国際教育交流事業●

タイ教職員招へいプログラム

実施報告書

2016 年 10 月 4 日 - 10 月 10 日

国 際 連 合 大 学 (UNU)
公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

●国際連合大学 2016-2017 年国際教育交流事業●

タイ教職員招へいプログラム

実施報告書

2016 年 10 月 4 日 - 10 月 10 日

国 際 連 合 大 学 (UNU)
公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

はじめに

国際連合大学（United Nations University）は、持続可能な人類の安全保障、気候変動、開発、平和構築など、国連とその加盟国が直面している、喫緊の地球規模の諸問題の解決への取り組みに、研究、教育、能力開発、知識の普及を通じて寄与することを目的とする国連機関です。

国際連合大学は、2002 年より主にアジア太平洋地域の教職員や教育分野の専門家等の資質の向上と相互理解の促進を目的とし、日本政府からの拠出金をもとに「日本国際教育交流プロジェクト」を開始しました。

2000 年に設立された「ユネスコ青年交流信託基金」で実施されていたプログラムは、同年より本事業のもとで開催されることになり、国際連合大学の委託を受け、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、これまでに韓国および中国との交流を行い、それぞれ 1500 名以上の教職員を招へいしてきました。2015 年からは、この国際教育交流事業の一環として、さらに多くの国の教職員との交流を図るため、文部科学省、タイ教育省の協力のもと、新たに「タイ教職員招へいプログラム」が始まり、第 1 回となる 2015 年はタイ教職員 15 名を本邦に招へいしました。

今回のプログラムでは、2016 年 10 月 4 日から 10 日まで、タイの中等教育の教職員等 15 名を日本に招へいし、学校現場およびその他の教育、文化施設の訪問や日本教職員との教育交流会を通して、日本の教育制度およびその現状の理解を深め、ひいては、両国の相互理解と友好を促進することを目的としております。

実施にあたりましては、文部科学省、タイ教育省、訪問先の学校、その他教育・文化機関等、多数の方々の多大なるご支援とご協力をいただきました。ここにあらためて関係の皆様方に厚く御礼申し上げます。

2017 年 3 月

国際連合大学

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

目次

第Ⅰ章 実施内容

1. 実施概要	3
2. 学校・教育機関訪問	4
3. 日タイ教育交流会	7

第Ⅱ章 参加者アンケート

1. タイ教職員	13
2. 日本教職員(日タイ教育交流会参加者)	20

第Ⅲ章 関係者コメント

1. タイ教職員	27
2. 訪問受入れ機関	28
3. 主催・実施機関	30

付録

1. 実施要項	34
2. プログラム日程	36
3. 参加者リスト	38
4. 関係機関リスト	39
5. 文部科学省講義資料	42
6. 写真	45

第Ⅰ章

実施内容

1. 実施概要
2. 学校・教育機関訪問
3. 日タイ教育交流会

1. 実施概要

今回のタイ教職員招へいプログラムでは、タイの中等教育教職員等 15 名を 2016 年 10 月 4 日（火）から 10 月 10 日（月）の 7 日間にわたり本邦に招へいた。

タイ教職員 15 名は、2016 年 10 月 4 日（火）に来日した。到着後、昼食をとり、宿泊先であるアークホテル東京池袋にて、オリエンテーションが行われた。はじめに公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）人物交流部の進藤由美部長の歓迎のあいさつがあり、続いて随行する ACCU 職員およびプロジェクトスタッフ、通訳が紹介され、最後に、担当職員よりプログラム日程の説明や滞在ガイダンスなどが行われた。続いて同会場にて情報共有会としてタイ教職員同士の話し合いの時間が設けられ、文化授業や日タイ教育交流会に向けて参加者同士で意見の交換が行われた。

翌 10 月 5 日（水）より学校・教育機関訪問が始まった。5 日（水）は午前には文部科学省を表敬訪問し、また文部科学省による講義を受けた。午後は青山学院高等部を訪問した。6 日（木）は、ユネスコスクールである多摩市立東愛宕中学校を訪問した。同校では、タイ教職員による文化授業も行われた。7 日（金）は午前、教育出版株式会社を、午後には東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を訪問した。また、ホテル帰着後には情報共有会が行われ、教育機関訪問等を通じて学んだことを 15 人全員が発表し合うと共に 9 日（日）の成果報告に向けた発表準備が行われた。

10 月 8 日（土）は浅草を訪問し、人力車体験や仲見世通り、浅草寺などを見学することで日本文化への理解を深めた。

10 月 9 日（日）には、「日タイ教育交流会」が行われ、全国各地から集まった日本教職員 15 名との交流を通して、互いの国の教育について理解を深めると共に、両国の教職員の持続可能なネットワークづくりが行われた。

同日、プログラムの締め括りとして歓送レセプションが行われた。歓送レセプションでは主催の国際連合大学サステイナビリティ高等研究所の古田知美事務局長のあいさつ、ユパー・ポーンセート団長の答礼に続き、両氏による記念品交換が行われた。また、実施機関である ACCU を代表して高坂節三理事、協力機関であるタイ教育省を代表してウィライラック・パドゥンキッティマーン氏が登壇し、記念品交換が行われた。記念品交換が終わると ACCU の堀江振一郎事務局長より参加者 15 名に参加証明書が授与された。その後、文部科学省大臣官房国際課国際戦略企画室の小林洋介室長より乾杯の音頭で楽しい歓談の時間が始まった。最後に両国の教職員が互いに歌を贈りあった。タイ教職員は『ローイ・クラトンの歌』を、日本教職員は『上を向いて歩こう』を披露した。両国の教職員が一緒に歌い、踊るなど会場が非常に盛り上がる中、歓送レセプションは幕を閉じた。

10 月 10 日（月）、すべての日程を終えた一行は羽田空港より帰途についた。

2. 学校・教育機関訪問

本プログラムで訪問団は、文部科学省、青山学院高等部、多摩市立東愛宕中学校、教育出版株式会社、東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を訪問した。

2-1. 文部科学省

プログラム第2日の10月5日（水）、一行は文部科学省を表敬訪問した。はじめに文部科学省大臣官房国際課の匂坂克久課長より歓迎のあいさつ、ユパー・ポーンセート団長の答礼があった。続いて、両氏による記念品交換および全員での記念写真撮影が行われた。

表敬訪問に続いて、同会場にて日本における初等中等教育について、講義が行われた。講師は初等中等教育局初等中等教育企画課の北野允課長補佐であった。（講義資料は巻末に収録）。講義終了後、質疑応答の時間が設けられ、「教育の質を保つための取り組みについて」、「教職員の研修について」、「国立・公立・私立の特徴について」などの質問があがった。

続いて、生涯学習政策局社会教育課地域・学校支援推進室の下田力室長補佐を講師として迎え「地域と学校の連携協働の推進について」と題した講義が行われた。（講義資料は巻末に収録）質疑応答では、「“地域”とはどの程度の広さを指すか」、「各地域の活動に対する支援について」、「各校の卒業生が担う役割について」などの質問があがった。



大臣官房国際課長の匂坂氏（右）と訪問団団長のポーンセート氏（左）

2-2. 青山学院高等部

同日、一行は青山学院高等部を訪問した。同校は、キリスト教信仰に基づいた幼稚園から大学院までを擁する総合学園としてイエスが語った「地の塩、世の光」をスクールモットーとして教育や研究を行っている。

学校到着後、カフェテリアにて学食体験および教職員との交流の時間が持たれた。同校の西川良三高等部長をはじめ同校の多くの教職員が訪問団員と昼食を共にし、英語・日本語・タイ語が飛び交う楽しいひとときとなった。昼食後、会議室に場所を移し、歓迎セレモニーが行われ、西山高等部長が歓迎のあいさつを、訪問団を代表してパトムポン・スパルット副団長が答礼を述べた。また、同校と訪問団の記念品交換が行われた。続いて、同校国際交流委員の藤井徹也氏より学校説明が行われた。質疑応答では制服や校則についての質問があがった。休憩を挟み、ホームルームの見学、教職員との懇談会が行われた。懇談会では、第二外国語教育や塾について、授業についていけない生徒のサポート、ネイティブスピーカーの割合など様々な話題があがった。

続いて、ビデオチャット交流が行われた。訪問団員のパッチャリン・サグウアンポン

パイロット氏の所属校であるチュラロンコン大学附属中等学校の教室と、青山学院高等部をスカイプで連結し、互いの文化を紹介し合うアクティビティーを行った。〇×クイズ形式で自国の文化についてのクイズを出し合い、両国の生徒が友好を深めた。ビデオチャット交流終了後、授業参観が行われ、情報・数学・書道の授業を見学した。また、施設見学も同時に行い、講堂や図書室などを見学し説明を受けた。休憩を挟み、次は清掃活動、部活動の見学を行った。剣道、フェンシング、バレーボール、野球、ダンスなど多彩な部活動を見学したのち、最後には茶道部による御手前体験が準備されており、日本文化に触れることもできた。御手前体験が終わると、校舎前で記念写真撮影を行い一行は同校をあとにした。



茶道部による御手前体験を楽しむタイ教職員

2-3. 多摩市立東愛宕中学校

10月6日(木)、一行は多摩市立東愛宕中学校を訪問した。この日の訪問には国際連合大学サステナビリティ高等研究所の古田知美事務局長が同校した。

1972年に設立された同校は、ユネスコスクールに加盟し、多摩市教育委員会研究奨励校としてESD(持続可能な開発のための教育)の研究発表を行っている。

中庭の芝生化および開放、地域行事への参加支援、近隣学校と小中連携を積極的に推進するなどさまざまな取り組みを行っている。

学校到着後、図書室にて歓迎セレモニーが行われた。歓迎セレモニーには、同校の千葉正法校長、竹田和彦副校長のほか、多摩市教育委員会より清水哲也教育長、教育指導課の畑大介指導主事が出席した。まず、清水教育長、千葉校長より歓迎のあいさつがあり、訪問団からはサラワン・マンターウォーンウォン氏が答礼を述べた。また清水教育長とユパー・ポーンセート団長が記念品交換を行った。続いて、千葉校長より学校説明があり、地域社会・国際社会への貢献、キャリア教育、環境教育、防災教育、学校間交流など同校の特色ある取り組みが紹介された。質疑応答では、「緑が多い学校だと感じたが、どのように保持しているのか」、「防災教育はどの授業時間に行うのか」などの質問があがった。

昼食時には、配膳を見学するとともに、2年生の生徒と給食を共にした。

続いて、体育館にてタイ教職員による同校2年生を対象とした授業が行われた。授業の前半ではタイの文化・伝統を紹介するプレゼンテーションが行われた。後半では、タイの伝統的な踊りであるラムウォンを教える内容となった。タイ教職員と生徒が音楽に合わせ円になって仲良くラムウォンを踊る楽しいひとときとなった。

続く、授業参観では、総合的な学習の時間での歯磨き指導のほか、国語(古文)、社会などの授業を見学した。授業参観終了後、教職員との交流会が持たれた。交流会には、千葉校長、竹田副校長、畑指導主事のほか、教育連携コーディネーターの原島久男氏、

酒井淳主幹教諭、小林浄子主任養護教諭など多くの教職員が出席した。養蜂やゴーヤ栽培など同校の取組みのほか、ESD 実践のための教職員養成や指導案などさまざまな話題があがった。

部活動の見学を行いながら校舎をあとにした一行は、学校を背景に記念撮影を行い、生徒・教職員のあたたかい見送りを受けながら同校をあとにした。



タイ伝統舞踊ラムウォンを教わる生徒たち

2-4. 教育出版株式会社

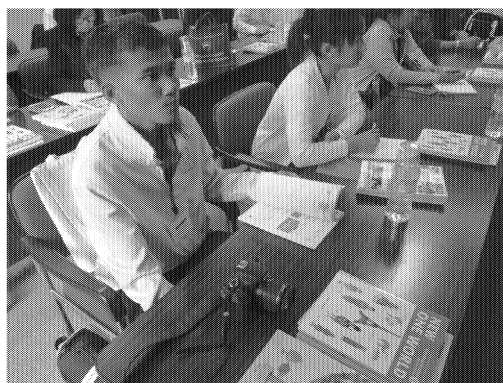
10月7日（金）午前、一行は教育出版株式会社を訪問した。同社は、小学校、中学校、高等学校の教科書や教育関連書籍を出版・販売しているほか、デジタル教科書などの教材・教具、教育ソフト等の製造・販売も行っている。

到着後、事業開発局事業開発センターの南館伸介主任の司会・進行のもと2つの講義が行われた。はじめに、同社の執行役員である松原紀男氏を講師として向かえ、「教科書編集のプロセス」と題した講義が行われた。同社の概要からはじまり、各国の教科書制度を整理したうえで、具体的な作業の説明を交えながら日本において教科書が使用されるまでの流れについて学んだ。質

疑応答では、教職員の教科書執筆の有無、教科書制作における外国との連携、同社が行うミャンマーへの教科書支援についての質問があがった。

続いて、教育調査研究所の寺崎千秋研究部長による、「日本の教科書の変遷と最近の傾向～学習指導要領改訂の経緯」と題された講義を受け、各学習指導要領およびその下でつくられた教科書の特徴について説明を受けた。質疑応答では、教科書の評価システムの有無、教科書に物語などを掲載する場合の手続き、教科書会社の競争による教科書の質の向上などについての質問があがった。

講義終了後、記念品交換および記念撮影を行い一行は同社をあとにした。



教科書についての講義に熱心に耳を傾けるタイ教職員

2-5.

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校

同日、一行は東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を訪問した。1954年に創立された同校は、日本唯一の国立大学附属音楽高等学校であり、専攻実技はもちろんのこと、ソルフェージュ、音楽理論、オーケストラ、合唱、室内楽、ピアノ初見アンサンブルといった様々な授業で、大学教員による直接指導が行われている。また、芸術分

野で初めてスーパーグローバルハイスクールの指定を受けた。

到着後、会議室に案内され、同校の鈴木芳明副校長より歓迎のあいさつであたたかく迎えられた。続いて、2 グループに分かれて授業参観が行われ、ソルフェージュおよび邦楽の授業を見学した。邦楽の授業では、生徒が『さくらさくら』を演奏し、訪問団を歓迎した。また、各楽器の紹介も行われ訪問団員は日本の伝統楽器への理解を深めた。授業見学後、会議室にて生徒との交流の時間が設けられ、2 つのグループに分かれ訪問団員と同校の生徒が交流を深めた。将来の夢や学校生活について訪問団員から生徒への質問があがっただけでなく、生徒からもタイの文化、伝統楽器などについて質問があがった。昼食を挟んで、次は教職員との交流会および学校説明が行われた。2 グループに分かれて行われた教職員との交流会では、同校の教育についてなど様々な質問があがったほか、各グループから歌声が聞こえてくる場面もあった。互いの国の歌を紹介し、音楽を通して交流が成された楽しいひとときとなった。鈴木副校長による学校説明では、同校の高大連携教育、洋楽・邦楽教育、専門科目や副科実技の授業についての説明がなされたほか、伝統文化の継承や異文化交流の取組みも紹介された。質疑応答では、「大学進学時の試験について」、「卒業後の進路」、「地方から進学した生徒の生活について」、「海外からの留学生の有無」など様々な質問があがった。

続いて、再び授業参観が行われ、2 つのグループに分かれてオーケストラおよび合唱の授業が行われた。同校の高大連携教育の一環として大学教員による高度な指導が

行われているこれらの授業を見学した訪問団員からは感嘆の声があがった。

授業見学を終え会議室に戻ると、訪問団を代表してパッチャリン・サグゥアンポンパイロート氏があたたかいおもてなしに対するお礼のあいさつを述べた。また、鈴木副校長とユパー・ポーンセート団長による記念品交換が行われた。同校から訪問団に、「日タイ友好」と書かれた達磨が贈られた。最後に校舎前で記念撮影を行い、一行は同校をあとにした。



オーケストラの授業を見学するタイ教職員

3. 日タイ教育交流会

日タイ両国の教職員の友好を深め、互いの国の教育について理解を深めるため、10 月 9 日(日)には、日本出版会館 4 階にて、タイ教職員 15 名、日本教職員 15 名の計 30 名が参加する「日タイ教育交流会」が行われた。

3-1. 開会

ACCU 人物交流部の進藤由美部長の開会のあいさつで交流会が始まった。進藤部長は、「是非この機会を最大限に活用していただき、両国の教育の理解、そして友好を深めて頂ければ幸いです」と両国の教職員を激励した。進藤部長のあいさつの後、

ACCU 職員、通訳、プロジェクトスタッフ、ボランティアスタッフの紹介が行われた。

3-2. 活動 1：アイスブレイク

アイスブレイクを目的とした活動 1 では、それぞれの参加者が学校自慢の写真 1 枚を持参し、写真を紹介しながらの自己紹介を行った。持ち時間 1 分での自己紹介を、ペアを交代しながら行っていった。学校行事、学校設備、学校で飼育している動物など各校の特色が紹介された。



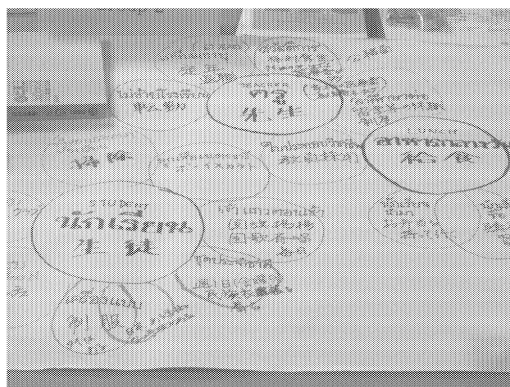
タイ教職員自己紹介をする両国教職員

3-3. 活動 2：日本・タイの教育を知る

両国の教育について知ることを目的とした活動 2 では、タイ教育省による講義、訪問団による発表、ディスカッションが行われた。

はじめにタイ教育省ウィライラック・パドゥンキッティマーン氏より、タイの教育の概要についての講義があり、タイ教育省の組織と機能、教育システム、基礎教育、技術教育、職業訓練の促進についての説明がなされた。続いて、ユパー・ポーンセート団長より、プログラムの学びについて発表があり、各機関での訪問内容や、成果について紹介した。パドゥンキッティマーン氏、ポーンセート氏の発表のあとには、グ

ループ活動の時間が持たれ、両氏の発表を聞き、そこで気付いた両国の教育の共通点や相違点についてまとめた。各グループに 1 枚ずつ配布された模造紙に花びらを書き、ピンク色の花びらには両国の共通点、水色には相違点を書き出した。両国ともに生徒による掃除の時間、部活動、制服について、教職員の定年退職や教員採用試験について共通点が見られた。一方、授業参観や宗教の授業の有無、また教職員（公務員）の福利厚生についてなどに相違が見られた。



両国の共通点と相違点を表した成果物

3-4. 活動 3：テーマ別ディスカッション

続いて活動 4 では、参加者は興味に応じて、①キャリア教育、②授業以外の教育、③理数系教育、④英語、国際理解教育のグループに分かれ、ディスカッションと発表を行った。各グループでは、現状・課題・成果を共有し、解決策を考え、相手国から取り入れたい教育の視点や事例などを話し合い、成果は模造紙にまとめた。各グループは発表で以下のようにまとめた。

グループ 1: キャリア教育

両国の共通点として、将来のビジョンを描けない生徒が多いということが挙げられ

る。解決策として、卒業生や大学の教授を招いての講義、適性テストや職場体験の活用などのアイデアが出た。個々の生徒の適性に応じた指導、職業訓練を行いたいという共通の目標も確認した。

グループ 2: 授業以外の教育

タイには部活動があるが成績評価の対象になり、入りたい部活に入れない場合がある。日本では評価の対象にならず希望制のため入りたいところに入れるのでタイにも取り入れたいと感じた。但し、日本では教員の専門と関係なく顧問を任せられること、教職員が時間に余裕がないなどといった課題があることも確認した。

ホームルームの頻度や宗教の授業の有無において両国の相違点がわかった。また、両国共通の課題として、生徒のスマートフォン使用の在り方が挙げられた。

グループ 3: 理数系教育

理数の授業内容が多く難しいためか、理数系科目が不得意の生徒がいることは両国共通であることがわかった。課題として、塾に行くか行かないかで実力に差がつくこと、授業の焦点をどこに当てるか、授業時間が十分でないことに加え教員自身も教材を開発するような時間がないことが挙げられた。また、なぜ勉強するのかわからない生徒のために関心を喚起する他科目との横断的指導、ICT の活用、一方的な指導ではなく、生徒同士の教え合いなどを試すなどが今後の目標・理想として挙げられた。

グループ 4: 英語、国際理解教育

英語学習を妨げているものは何か考えた

ところ、家庭環境が悪くてやる気がでない、話せる環境がないなどの意見が挙がった。改善策として、一方的な指導ではなく会話を促す、国際交流活動をしている団体などに教室に来てもらうなどが挙げられた。高校では入試重視で指導しているがコミュニケーションツールとして教えることが大事であることを両国の教員が確認した。



グループディスカッションについての発表の様子

3-5. 活動 4 : 持続可能な交流に向けて

最後となる活動 4 では、両国職員の持続的な交流のきっかけを作るため、今後の交流方法についてディスカッションをした。グループごとに、「SNS とメールでお正月に連絡をする」、「学校行事の動画などを送る」など今後の交流について約束を交わしあうことで最後の活動を締め括った。

3-6. 閉会

すべての活動の終了後、ACCU の堀江事務局長より、「この交流会での初めの一步を大切に、未来を担う子どもたちを育てる同志として持続的な交流が続くことを願っています」と閉会のあいさつを述べ、本交流会は幕を閉じた。

第II章

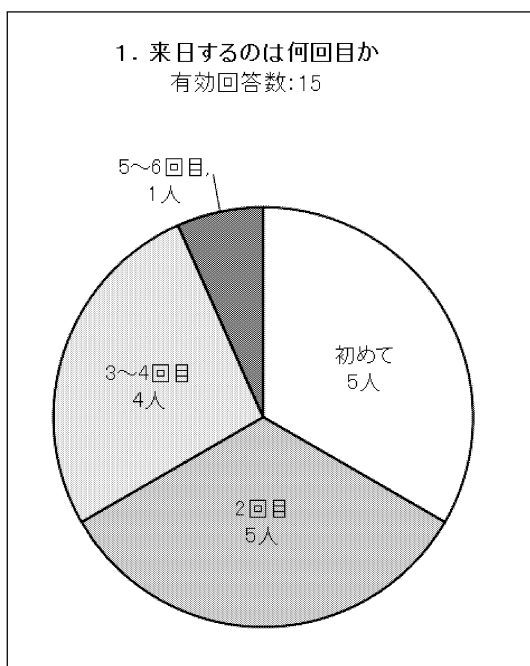
参加者アンケート

1. タイ教職員
2. 日本教職員
(日タイ教育交流会参加者)

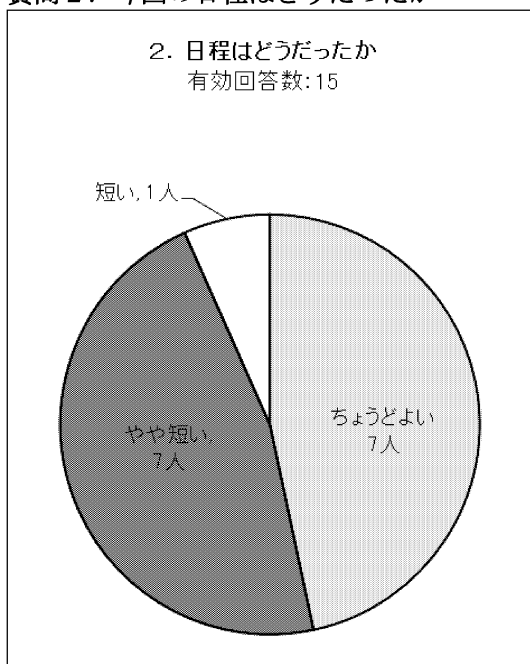
1. タイ教職員

*原文はタイ語（一部、英語）。ACCUにて仮訳。

質問 1. 来日するのは何回目か



質問 2. 今回の日程はどうだったか



【ちょうどよい】

- 講義、学校見学、教科書出版会社訪問、その他すべて適切な時間だった。

- 次回このような機会があるならば博物館見学を加えると良いと思う。

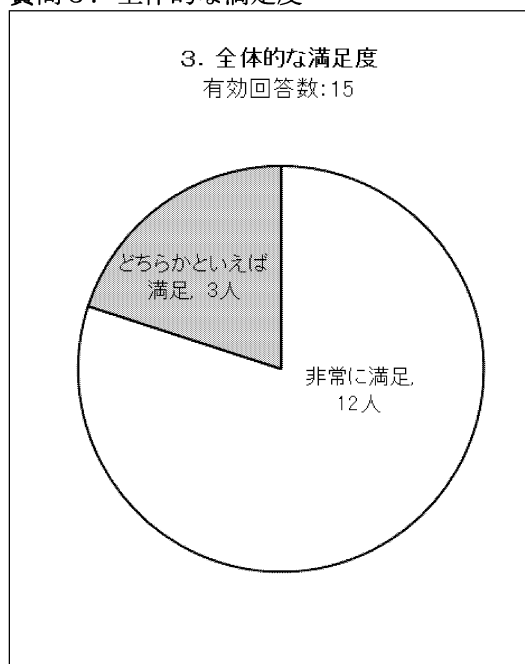
【やや短い】

- 職業訓練教育を見学したかった。
- 有意義な学校訪問は丸一日あったほうがよい。
- 学校の構造を全て見られるよう時間を延ばしたほうがよい。日本の教職員との意見交換の時間がもっと欲しかった。
- 期間を増やして 10-15 日間あれば全教育課程(初等、中等、高等)を見学することができるだろう。

【短い】

時間が短すぎる。学校訪問は 1 校につき 1 日必要である。

質問 3. 全体的な満足度



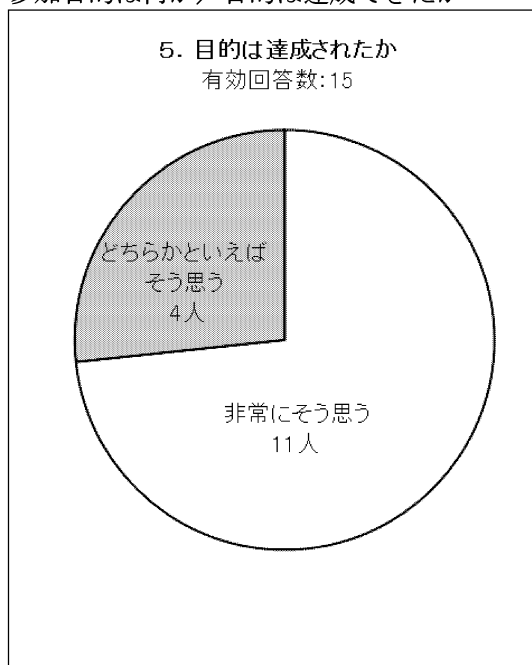
【非常に満足】

- 見学プランが大変良くできていた。
- 日本の教職員に会い互いの知識を交換する機会を得た。また、今後お互いに教育面で協力し合うネットワークを構築する機会を持てた。
- 学校の方針や様々な教育活動、授業や部活動にいたるまで、日本の教育の概要を垣間見ることができた。
- 日本人が持っている知識や経験を学ぶことができた。

- 日本は素晴らしい教育システムも持っている国である。国際社会に対応できるよう生徒たちの能力を伸ばして行きたいので、是非タイの教育に取り入れて活用したい。
 - プログラムに参加できてよかった。日本の先生が生徒に教えているところを見ることができて大変満足した。視野が広がった。
- 【どちらかといえば満足】
- 興味のある活動があり質問したいと思っても時間が足りなくてできなかった。

質問4および5.

参加目的は何か／目的は達成できたか



【非常にそう思う】

参加目的

- 教育面で日本との関係を築く。
- 教育面での経験や知識を交換する教育ネットワークをつくる。
- 文部科学省、UNU、ACCUをはじめとする機関との協力関係の構築。
- 業務ネットワークを構築する。
- 日本の教育システムを学びタイでの教育に活用する。日本の教師や生徒と交流する。
- 文化交流をする。
- 日本の文化を知り日本教職員と意見交

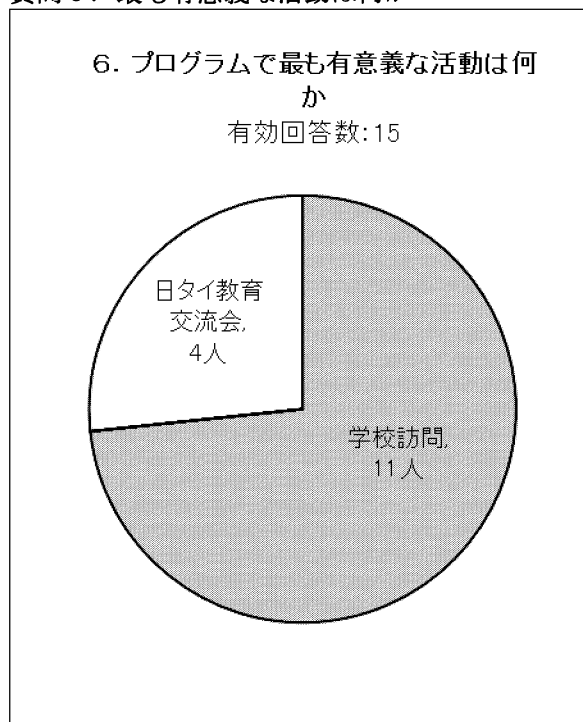
- 換し、互いに様々な活動を発表する。
- 将来的に教育面で役に立つよう日本教職員と意見交換をして友好を深める。
- 日本の教育を学び、学校内の業務や教授法を視察する。日本教職員と意見交換をする。
- 協力体制の構築と意見交換。日本の文化を知る。
- 日本の教育の良いところを学び、持ち帰って発展させる。両国の協力体制を構築してゆく。

【どちらかといえばそう思う】

参加目的

- 文化交流を行う。
- 自分の生徒の能力や知識を日本の生徒たちに伝える。

質問6. 最も有意義な活動は何か



【学校訪問】

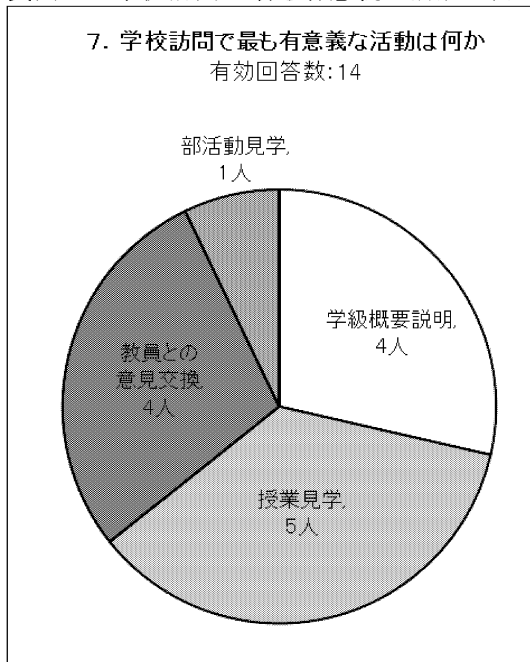
- 学校の様子を見ることができ教師や生徒たちと交流できた。
- 授業や部活動の雰囲気を見ることができた。
- 学校が教育方針に沿って具体的な成果を出す姿を見ることができた。
- 授業の雰囲気を見ることができた。生徒が可愛かった。

- 授業の実際の様子を見ることができた。先生や生徒と交流し様々な疑問点について質問し合うことができた。校舎や教室を見ることができた。
- それぞれの学校で、違うところ、良いところ、悪いところを見ることができた。情報を持ち帰り自分たちの学校で共有することができる。
- 教育の現状を知り、日本教職員の業務内容を理解し、タイの授業に適用できるものを得ることができた。
- 日本の文化と教育を見ることができた。

【日タイ教育交流会】

- 問題点と解決法を聞くことができた。
- 日本人の英語教員と話をして、英語を公用語としない国での英語学習には似たような問題点があることがわかった。互いに理解し合えるので目標に向かって協力できるだろう。

質問 7. 学校訪問で最も有意義な活動は何か



【授業見学】

- 授業を見ることができた。教員の教授法や生徒の学習の様子を見学することができた。
- 日本の授業を見学し類似点や相違点を見ることができた。
- 教師と生徒の関係や実際の授業を見る

ことができた。

【学校概要説明】

- 学校の雰囲気を見ることができ、実際の業務内容について知ることができた。
- 様々な情報とデータを知ることができた。大変深く掘り下げており、活用可能な情報を得ることができた。
- 自分の学校と比較して、活用・改善することにつながる。
- 学校の概要を知ることができ、疑問点について質問する機会を持てた。

【教員との意見交換】

- 生徒のためになるような仕事をするにはどうすべきか話し合い、一緒に考えることができた。
- 教職員から直接情報を得ることができた。通訳を介すると時間がもったいなく不自然なので教師同士、英語で直接会話すれば、よりレベルの高い交流ができるのではないかな。
- どの学校訪問も同様に大変有意義だったが、特に先生たちとの意見交換では様々な情報を得られ理解が深まった。

【部活動見学】

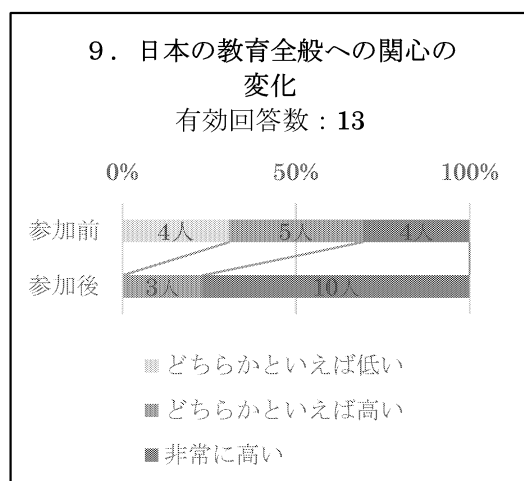
- 現状を見ることができた。

質問 8. 他にどのようなプログラムがあったらよいか

- 日本教職員と交流し学ぶ時間がもっとあったほうがよい。
- 日本の歴史や文化について学ぶために博物館を訪問するプログラムがあったらよい。
- 日本の文化を実技で学ぶようなものに参加できたらよい。たとえば簡単な日本料理のレッスンなど。
- 職業訓練校、小学校、大学の見学
- 歴史を学べる所、博物館、記念碑などを訪れたい。
- 日本の職業教育を見たいので、商業校の見学があるとよい。タイの学校では、普通の学校でも職業教育の授業を行っている。
- 古来の文化あるいは消えつつある文化を学ぶ場を設けるべき。消え行くものを知ることにより復活させることがで

- きると思う。
- タイ教職員と日本教職員がペアになって 1 対 1 で教育制度について話す機会があればいい。
 - 学習体験を生徒にもっと話してほしいと思った。

質問 9. 日本の教育全般への関心の変化

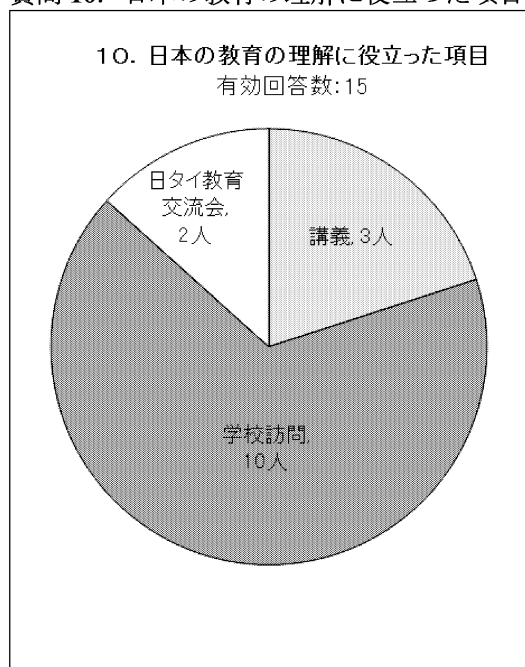


- 文部科学省の講義を受け、学校訪問では教職員や管理職に質問をする機会を持てたので、日本の教育への関心が増した。
- プログラムに参加する前は、日本の教師は生徒に指示して従わせているのだと思っていたが、参加後は教師が生徒に自分で考えさせて自分で行動させることに力を入れていることがわかった。
- 実際に目で見て、知ることができ、加えて体験することができた。
- 世界で高い評価を受けるなど、常に進化してきた日本の教育。あらゆる面でクオリティの高い人材を育てるために、そして国を発展させるために何をしてきたのかということに大変興味を持った。
- 生徒たちに公德心について教えていることに関心を持った。
- 英語教師なので英語を公用語として使う国や英語を母国語とする教師にしか関心がなく、日本にはあまり興味がなかった。しかし日本人英語教師と意見を交わしてから、似たような問題を

抱えていることがわかったので今後は協力し合っていけると思う。

- 以前からテレビ番組など様々なメディアを通して日本の教育について知る機会があり教育制度について学びたいと思っていた。
- 日本の科学技術分野の教育に興味があった。プログラム参加後、より興味を持った。
- 日本の教育は質が高いので以前から関心があった。
- 日本の教育システムの様々な面に興味を持ち感銘を受けた。ぜひタイの教育の発展に役立てたい。

質問 10. 日本の教育の理解に役立った項目



【講義】

- 施策と実践、その両方において教育の全体像を見ることができた。
- 情報を得ることができた。
- 講義を聴いたおかげで、日本の教育制度について理解を深めることができた。

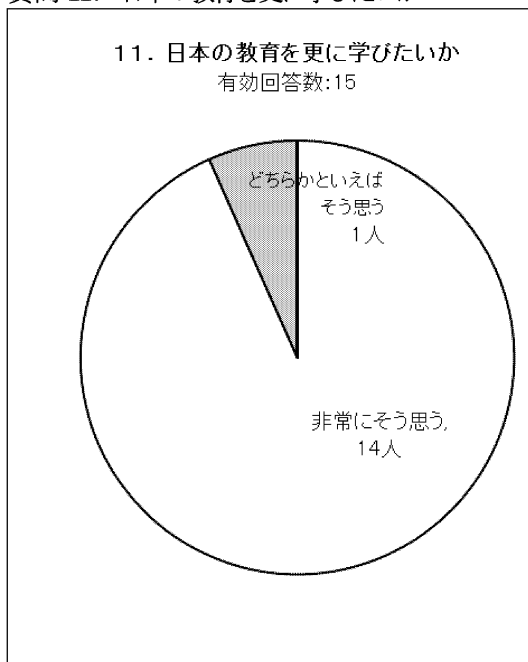
【学校訪問】

- 学校訪問、部活動見学によって日本の教育への理解がより深まった。
- 学校の様子が理解できた。部活動、授業、生徒、文化など、学校によって異なることがわかった。

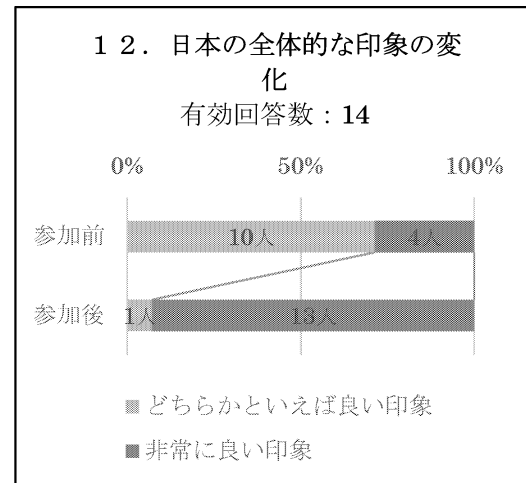
【日タイ教育交流会】

- 両国の教職員と話し合い、質問する機会を持つことができた。
- 各学校が文部科学省の指導要領に沿って指導をしているが、同じ指導方法をとらず、教育方針や業務内容などをそれぞれ規定しているように思えた。
- 実際に指導している人たちと話し質問をすることによって様々な情報を得ることができた。

質問 11. 日本の教育を更に学びたいか



質問 12. 日本の全体的な印象の変化



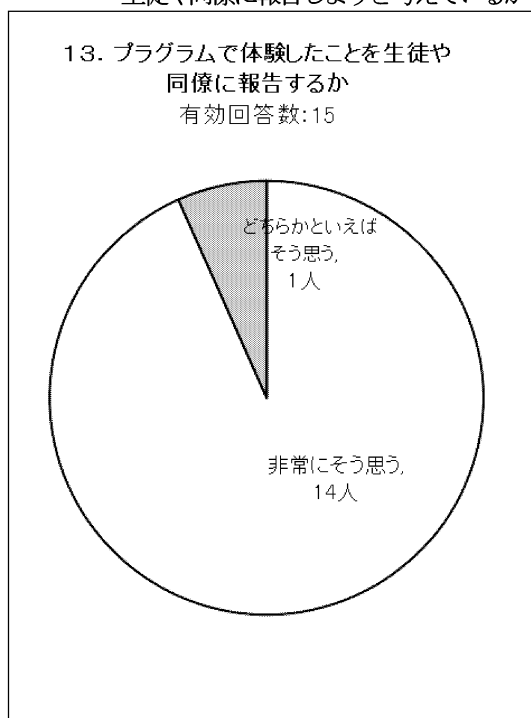
【非常に良い印象→非常に良い印象】

- 日本人は規律を守り、知識・能力があり、第2次世界大戦以降急速に国が発展したということを以前から知っていた。
- 日本人は規律正しく時間厳守で責任感がある。用心深く遠慮がちで恥ずかしがりやである。

【どちらかといえば良い印象→非常に良い印象】

- 日本教職員について理解を深めた。皆が礼儀正しいことがよくわかった。
- 効率の良さ、規律、茶道のような文化体験に感動した。
- 実際に自分の目で見て、本や動画サイト、テレビで見ていた以上に良かった。
- 人に対する気遣いがあり、礼儀正しく、ふるまいや話し言葉が丁寧である。
- プログラムに参加してから日本の文化に対する理解を深めた。日本人は他人に気遣いができ、何事にも手を抜かず責任感がある。
- 日本人は友好的で礼儀正しく自分を律することができる。
- 日本人の規律正しいところが好きである。

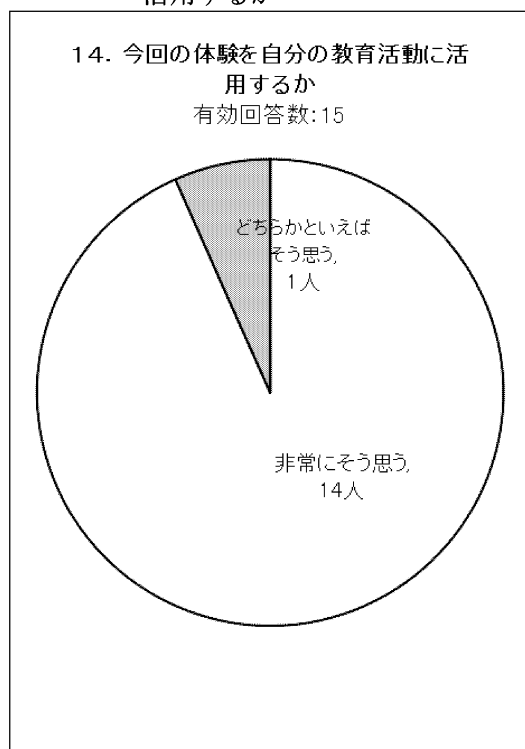
質問 13. プログラムで体験したことを
生徒や同僚に報告しようと考えているか



【非常にそう思う】

- 様々な体験から日本の教育の素晴らしい発展の過程を知ったのでぜひ伝えたい。
- 日本の文化をタイおよびタイ人の生活に活かしたいと強く思った。
- 日本のことをあまり知らない同僚や生徒に報告したい。教師や生徒が自分自身で分析し活用することができると思う。
- 教育面や生徒の振る舞いにおける共通点と相違点、また文化の違いを伝えたい。
- 実際に体験したことを伝えて生徒たちに熱意を持って考えるようになってもらいたい。
- 学校の会議において日本で見聞きしたことを伝えたい。
- 学校の管理職、教師、生徒に自分の体験を提供したい。
- 同僚、生徒に体験を話し、今後の教育発展のために日本の教師・生徒と交流をはかるネットワークを構築したい。

質問 14. 今回の体験を自分の教育活動に
活用するか



【非常にそう思う】

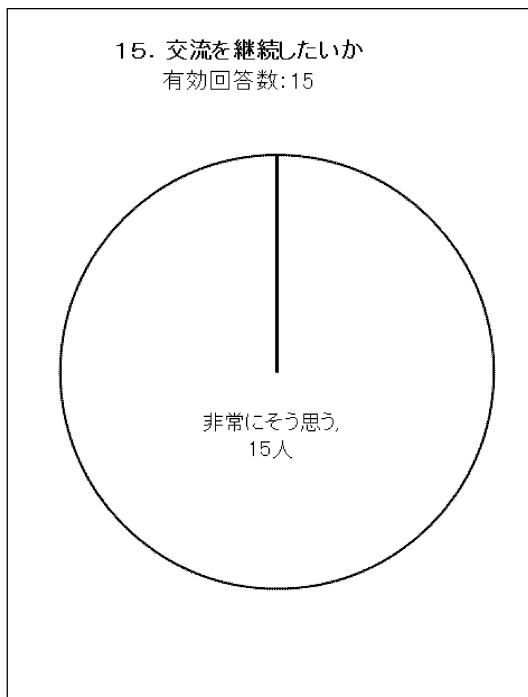
- 生徒が自分の技能や興味に沿って選択できる、多様な放課後部活動をぜひ取り入れたい。
- 生徒が自分で考え自分で決まりを作るといったオーナーシップを持つことに感銘を受けた。
- 生徒が真面目に楽しく活動している部活動を取り入れたい。
- タイ人の若者が、急速に変化する世界に適応して生きていけるよう教育するためにぜひ活用したい。
- まずは自分のホームルームから始めようと思う。自分はまだ本来の役割を果たせていないと思った。日本の学校の教師が生徒と一緒に教室の掃除をしているのを見て自分自身を変えなければいけないと感じた。
- 生徒に自分で考えさせることを取り入れたい。教師が生徒に質問を投げかけ、生徒にゆっくり考えさせる。自分が担任しているクラスでESDを取り入れたい。
- 毎日の放課後の部活と掃除を取り入れたい。

- 授業、生きる力、規律の正しさを統合的に取り入れたい。
- 得た経験を学校教育と自分の生徒のために使いたい。

【どちらかといえばそう思う】

- 交流会で得られた教育方法や概念を取り入れて最大限に活用したい。

質問 15. 交流を継続したいか、

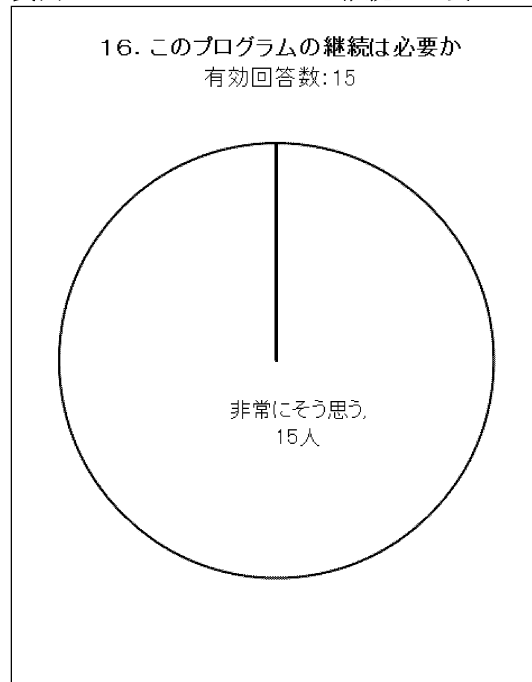


【非常にそう思う】

- 明白かつ持続的な形で活動を行って行きたい。
- 両国の教師と生徒がお互いの文化や生活について学ぶ良い機会となるので継続したい。
- 生徒が自分自身で考えたり調べたり、また文化を守ることを後押しすることにつながる学習交流には大変興味がある。
- ビデオチャット、手紙、E-メール、SNSなどを使って連絡をとりたい。
- E-メールやカードを送り合うことを約束した。メールや手紙、SNS を使って交流し、もし機会があれば、お互いの学校を見学する。自分は関係・交流の仲介役となる。

- まずは、日タイ教育交流会の英語・国際教育のグループから始める。SNS、Eメールで3ヶ月ごとに学校での活動を報告し合い、連絡を取り合うことを互いに確認した。今後、さらにお互いのことを知ることができると思う。
- SNS など様々な通信ツールを使って連絡を取り合い授業や文化面での交流を行いたい。
- 毎月、SNSなどで活動するなど交流会を持ちたい。
- 歴史の話で盛り上がった日本の先生と交流を続けたい。日本美術を勉強している自分の学校の生徒を本プログラムで知り合った先生と交流させたい。
- 教育面でのネットワークを構築したい。教育は発展の基本である。質の良い教育により国が発展する。
- 今後も末長く、日タイ教育交流会に参加した日本の先生と連絡を取り続けようと思う。

質問 16. このプログラムの継続は必要か



【非常にそう思う】

- 両国のネットワークを増やすためにぜひ必要。
- 教師の視野を広げ日本の教育をお手本

- にできる良い機会であるから必要。
- 両国間の教師同士が実際に会って話し、理解を深めることができる。またタイと日本の学校間の協力を推進することができる。
 - お互いに教授法、習慣文化を教え合えるので必要。
 - 両国の教育面の発展につながるネットワークとなり、教育の発展に寄与すると思う。
 - タイ教職員が経験したことをタイで生かせるので大変有意義である。またタイの発展につなげることができる。
 - 視野や知識をより広めることができる。
 - タイ教職員が新たな考え方、知識、教授法を得ることができる。
 - 教育面のネットワークを強化し、教育の発展を効果的に推し進めることができる。
 - 互いに良好な関係を築くことができ、また知識と経験を活用することができるので大変良いプログラムである。

2. 日本教職員 (日タイ教育交流会参加者)

1. 感想

- タイの教職員と学校の状況を話し合うことができ、お互いの国の相違を理解することができました。また、タイ教職員は日本教職員に対して好感を持っていることが表情から伝わりました。タイ教職員の方の英語力の高さに驚くと共に、自分の英語力の低さを実感しました。通訳の方がいるとはいえ、もう少し語学力を高めて国際交流をするべきだと思いました。
- 自身のプロフィールを詳細に書いていたことで、あとからタイ側の先生から思わぬ頂き物をもらえるチャンスに恵まれました。ある学校の敷地内には日本兵の戦没者碑があるそうです。事前に自分の興味ある分野を把握していただけで、お話が出来たことをとてもありがたいことだと思いました。
- 教科の課題について、国を越えて先生方と議論できたことはとても有意義な時間でした。一緒にお話した先生方は、校種も生徒の力も様々でしたが、抱えていることは共通していることが多いという印象を持ちました。「英語を使ってコミュニケーションを取るようになるには」、「どのようにすれば生徒が英語を勉強する気になるか」について議論しましたが、国が違っても、抱える問題・課題は一緒で、生徒に対する気持ちや想いも同じだということを実感できて、とても心強かったです。
- 日本人の先生方とも、ユネスコスクールとしての活動や国際理解教育、英語教育について様々な話をできたことは、とても刺激になりました。本校もユネスコスクールとして活動を始めていますが、まだ手探り状態の物が多く、課

題がたくさんあります。様々な実践を行っている先生方の話を聞いて、自分の学校の取り組みを改めて考え直したいと思いました。

- 理数系教育のグループに属したおかげで、タイの理数系教育の様子を垣間見ることができたのは勉強になりました。しかし、ディスカッションの終了時間がすぐに来て、もっと深化させる時間がなかったのが残念でした。ただ、他のグループの発表内容を聞くことでタイのさまざまな教育事情を知ることができ、知見を広めることができたのは面白かったです。
- ESD についての予備知識がある方と、まだそれほどない方がいらしたので、是非、今後も交流していくことで、ESD について推進していく機会があればよいと思いました。
- グループディスカッションでは両国の違いが見られたと同時に、『『どうして数学を勉強するの？将来数学を使う場面ってあるの？』と生徒に疑問を投げかけられる』というように両国間に共通した「あるある」も知ることができ、興味深いひとときとなりました。そして何よりも、「教育」という一つの共通項でタイの先生方とつながりを持てたことが大きな喜びでした。私自身、出身高校がスーパーサイエンスハイスクールで、その際にも「科学」という共通項で同年代のタイの高校生とつながりを持ち、国際交流の楽しさを実感していましたが、その感覚を今回の交流会を通じて久しぶりに得られたと考えています。この気持ちが熱いうちに生徒に還元し、国際感覚を育成していきたいと思いますし、今回の日タイ両国の先生方とのつながりも絶やさず、発展させていけたらと考えています。
- タイの先生方と交流ができ、1つのテーマから多くの視点で考えることがで

きました。すべてのワークがとても忙しく、もっとゆっくり話し合えばよかったと思いました。文化の違いが教育にもたらす影響や行事などタイのことを理解できたことはもちろん、日本の教育についても改めて考えるよい機会になりました。

- タイにおいての先生方がおかれている状況を知ることができてよかった。転勤が自分から希望しない限りないとか、家族ともども病院代や大学までの学費が免除になるということに驚かされた。テーマ別グループディスカッションも良かった。良い点も課題点もお互い共有することができたと思う。
- ほぼ、毎年のようにタイを訪れるので、タイで今回の先生方と再会してみたい。バンコク、アユタヤ、カンチャナブリ辺りの先生とは現実的に再会ができそうである。
- タイで行われている教育を、数値等で知る事ができ、タイが抱える問題を理解することができた。キャリア教育のグループにて、タイで実施されている有用な手法を聞き出せればと思い、質問したが、その場で教えて頂いた内容は、日本で行われているものと同様(職業体験等)であった。国は違うが、似た教育内容を実施しているのだと感じた。タイでは職業教育は、教科として設定されていることを知ったので、カリキュラムなどあれば拝見したい気持ちになった。先生方と連絡を取り、紹介してもらえるようになれば、日本で生かせるかもしれないと感じている。「進路意識の低い生徒をどうしていますか」という質問を受けたが、日本もタイ国も同様に生徒と向き合うことで解決を目指しているということであった。
- 自分自身が興味のあるテーマごとの分科会という形式で参加することができ

たのがとても良かったです。特に印象に残ったのが、フォーマル教育とノンフォーマル教育についての話でした。識字教育や職業教育などをノンフォーマル教育と言うのだそうですが、自分自身がタイの教育事情について、あまりにも無知であったと思い知らされました。教育の仕組みから、国そのものの状況や文化など様々なことが分かるのだということを改めて痛感した思いです。

- 両国の違いや共通点について、模造紙に花を描いていくグループワークは大変わかりやすいと思いました。実際の自分の授業にも応用しようと思います。テーマ別のグループディスカッションでは、全員が英語を教えているという共通点があり、英語の授業への生徒の取り組み方について、両国の教職員間で活発な意見が出ました。学校にもよるようですが、タイでは ICT 機器を使った授業が日本よりも盛んに行われている印象がありました。

2.交流計画

- タイの教職員の方から当日の懇親会で一緒に撮った写真を送っていただきました。今後、日本の季節の行事や風景をメッセージアプリで送りたいと思います。
- テーマ別ディスカッションのメンバーでメッセージアプリのグループを作成し、情報共有を行う。SNS のタイムラインで情報公開を行い、両国の違いや共通点探し、トピック探しを行う。ビデオチャットを用いたミーティングを行い、生徒間・教員間で国際交流の場を持つ。新年など、ポストカードの送り合いを実施する。
- 歴史教育の認識を深めるため、実際にタイに赴き、泰緬鉄道などの戦争に関する史跡を訪れたい。
- 英語・国際理解教育グループの先生方

とは連絡先を交換しました。定期的に自分の学校の情報をお知らせしたり、英語教育に関する情報を共有することを全員で確認しました。

- タイの教職員が来日したように、来年度以降に日本人教員がタイを訪問し、現地での様子を実際に体験できるプログラムを用意していただけるとありがたい。
- できるところから少しずつ交流をしたいと思っています。例えば、今回参加した教職員の授業や生徒の様子を互いに知らせ合って、コメントしたり、身近なところで共通のテーマを考えてそれをそれぞれの学校の生徒たちに考えさせて、インターネットや手紙で公開し合うなどです。
- 日タイ両国で気候・環境などのデータを測定し合い、その結果をまとめる合同研究の取り組みビデオチャットを通じて学期に 1 度くらいのペースでディスカッションを行う取り組み（ゆくゆくは本校の生徒を連れて実際にタイで交流を行いたい）

3.改善点

- グループを組む際、校種別でもグループを組んでいただける情報交換しやすくなるかと思いました。
- なかなか 15 名全員と話し、交流する時間がないのが現状でした。事前にメーリングリストなどを作って下さっていると、自分の言葉で自己紹介などが発信出来たのではと考えています。また、タイ側に日本語が話せる先生がいらっしやったので助かりました。日本側教員は英語のコミュニケーションが難しい先生は少し参加するにはハードルが高いプログラムだろうと思います。
- グループディスカッションでは、より具体的なトピックで話し合いが進められたらよかったと思いました。教育省だけでなく、小・中・高の先生方、科

目別等、一般の先生方のプレゼンテーションと質疑応答があればよかったです。自己紹介の時間も短い時間のローテーション形式ではなく、もっとゆっくりとっていただけるとより親しくなれると思いました。また、お互いの文化についても紹介する時間があればよかったです。

- 全体を通して、日本人教師からタイ教師への質問（その逆も含める）の時間があつたら良かったな、と思いました。聞きたいことが聞けませんでした。
- 日程的に難しいかも知れませんが、各アクティビティの時間がもっと取れるといいと感じました。特にグループワークは話せば話すほど様々な意見が出てきて、時間があればもっと深化させ、共有することも可能ではないか感じました。例えば、1 日目を今回のようなグループワークの時間とし、2 日目の午前中にディスカッションの内容を発表し、全員で共有するというようなこともありかと思いました。1 日の中で消化するにはもったいないプログラムであつたというのが正直な感想です。それくらいタイの先生方と率直に向き合って話ができただけの時間でした。
- 今回のプログラムでも、タイと日本の共通点や相違点について話し合う時間がありましたが、やや時間が短かったような気がします。
- グループの人数が多く感じました。8 人もいると限られた時間の中で発言する機会が減ってしまったり、日本でもそれぞれの学校の実情が違うため、話し合いがスムーズにできなかったと思います。まとめるときにも納得いく結論を導き出すことが難しいように感じました。通訳等の関係もあるかと思いますが、もう少し少人数のグループで行ってほしいです。
- タイの先生方の研修の成果発表があり

ましたが、私たちではなく、帰国後にタイの先生方に伝える内容なのではないかと思います。交流に焦点を当て、話し合いの時間を確保した方がより、有意義だったと思います。

- グループ討議の中で事例をあげて紹介する部分があつても良いと思う。たとえば、特徴的な行事を行っている実践報告とか、特色ある外国語教育の実践例など、何か具体的に映像や研究物の紹介があると良いと思う。
- 分科会形式のプログラムが少し長く感じたので、適宜グループチェンジできるような形になると良いと感じました。
- 今回は交流会終了後に歓送レセプションでの交流がありましたが、「韓国教職員招へいプログラム」の際に、一般の飲食店での交流をしたのがとても良かったので、タイの教職員の方々ともそのような場で交流することができたらと感じました。
- グループで話し合うのがとても良かったのですが、グループの中で司会進行者を決められたらよかったと思いました。また、グループの中での自己紹介の時間がなかったです。
- それぞれがカードに「私はこれについてタイ教師の意見が聞きたい」という形で1 人の議題に対して6 分ずつ話し合う、などしていただけたらもっと良かったと思います。
- グループでのネットワーク作りもそうですが、個別で「この学校と！」と考えている部分もありましたので、活動4「持続的なネットワークづくり」のペア版もあればいいかなとも思いました。

第Ⅲ章

関係者コメント

1. タイ教職員
2. 訪問受入れ機関
3. 主催・実施機関

1. タイ教職員

*原文は英語。ACCU にて仮訳。

●団長 ユパー・ポーンセート

本プログラムは非常に質が高く、最終日まで ACCU 職員による素晴らしいサポートがあった。文部科学省では、日本の教育制度や地域との連携について、教育出版株式会社では教科書について学び、日本の教育を理解するのにとても役立った。青山学院高等部、多摩市立東愛宕中学校、東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を訪問し、どのように教育委員会、教職員、PTA が力を合わせ、それぞれの学校のビジョンに向かって努力し、成功させているのかを知った。また、日本各地から 15 人の教職員が参加した日タイ教育交流会では、両国の相互理解を深めることができ、非常に有意義な時間であった。プログラムは終わったが、学校間のネットワークを築くのはこれからである。タイと日本の先生方が協力し、持続可能な教育のために尽力していきたい。

●副団長 パトムボン・スパルート

本プログラムは日タイ両国の教育者をつなげ、知識を共有する素晴らしい機会となった。特に教育、言語及び文化について理解を深め、ともに科学技術分野の発展を模索できたのはとても良かった。本プログラムは、両国間の情報共有やタイの教育の質の向上に非常に役立ち、今後もこのようなプログラムを毎年行うことで交流が継続することを願っている。また、我々は近い将来、日本教職員がタイを訪問することを期待している。

●タイ教育省国際協力局

ウィライラック・パドゥンキッティマーン

訪問団の本プログラムに対する第一印象は、スケジュールや書類の完成度の高さだった。オリエンテーションから各訪問機関、歓送レセプションまで緻密に計画され、日タイ両国語で表記されたパンフレットを見て、我々の到着前から周到

に準備を行った日本人の勤勉さとおもいやりを知った。プログラム初日、成田空港に到着した我々はあたたかい出迎えを受け、昼食とオリエンテーションを通じて訪問団員同士の仲を深めることができた。こうしたアイスブレイキングは、その後の旅程をともしにする上で非常に役に立った。毎日、宿泊先と訪問地を行き来する際には、ACCU の齋藤盛午氏・河口枝里子氏、通訳の野田ユワリー氏・吉川由佳氏が移動を楽しい時間にしてくださった。毎回、到着前には訪問先についての説明があり、訪問中もすべてのことに細心の注意を払ってくれた。訪問後には、団員の感想を聞き取り、反映してくれた。これは訪問団がそこで何を学んだか整理するのに大変役に立った。文部科学省への訪問は、日本の教育政策の大まかな全体像の理解を促し、特に初等中等教育および学校と地域の協力について学ぶことができた。私は個人的に、同省が地域コミュニティに対して物資や財政的な補助を出して、教育や文化活動への参加を奨励していることに非常に感銘を受けた。我々は、青山学院高等部、多摩市立東愛宕中学校、東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を訪問した。各学校において、教育委員会や教職員の方々は、素晴らしいチーム精神、生徒や学校をよくするための不断的努力とすべてのステークホルダーを取り込む意思決定プロセスで訪問団を驚かせた。また学校が生徒に自治権を与える取組みでは、生徒が自らルール作りを行うと、よりルールを守るということを知り、大変参考になった。学校の規模に関わらず、各学校が自校のアイデンティティを見出し、ESD（持続可能な発展のための教育）、日本文化の継承といった学校の特色に焦点をあてており、全ての教職員が学問知識と道徳によって生徒たちを育て上げることがわかった。また、生徒はスポーツ、音楽、日本文化などの部活動に参加するよう奨励されていた。このような教育環境によって、生徒たちは円満な人柄でバランスの取れた人物に育つことができるであろうと思った。教育出版の見学も記憶に残る訪問となった。私たちは、教育出版の教科書出版に

おける並々ならぬ尽力に大変感銘を受けた。関係者が、心から生徒のためになることをしようと心を砕いていることが明らかで、そのご尽力は、計画、出版から教科書選定にいたるまで見受けられた。さらに、価値ある体験となったのは、日タイ教育交流会である。このような交流が日タイの学校間のネットワークとパートナーシップをより深めたと確信している。同様に、日タイ文化交流も、大変価値あるものであった。双方にとってこの交流は目を見張るほど素晴らしいものだった。私たちは、青山学院高等部で茶道部のお茶会に参加する機会を得ることができ光榮に思う。日本人の方々も年齢にかかわらず、学校での文化交流活動と歓送レセプションでのタイの民族舞踊を楽しんでいらっしやったと信じている。最後に、この教育交流プログラムは日タイの教育面での関係を強化しただけではなく、お互いの国の特色ある文化に対する理解をより深めるものであったと申し上げる。

2. 訪問受入れ機関

●青山学院高等部

国際交流課長 藤井 徹也

プログラムの全体的印象

普段、当たり前だと思っている指導に、熱心に興味を持っていただき、質問をいただいた。特に教室清掃やクラブ活動の様子に興味をお持ちのようだった。事前に準備をして、校長を含め、周囲に依頼したのだが、曜日を選択できればもう少しサービスができたかと思うと、若干心残りがある。ビデオチャットを用いた交流に関しても、事前にもう少し詰めておかないと、うまくいかない。

プログラム成果

日本の持っている教育のスタイルが変わりゆく中、何を残し、何を本当に変えるべきかは、この社会を形成する全員が考えなければいけない問題であり、海外から教育関係者がいらっしやると、そのことについて考える機会を持つことができる。今回も「日本的なもの」に関して今後どのようにしたらよいのか考える機会となった。

プログラムの改善に向けた助言

このような交流は大切なことなので、今後ともお受けする方針に変わりはないが、日にちを多少選べると、もう少し対応が異なったかもしれない。また、ビデオチャットを用いた交流に関しては、事前に十分な準備が必要だと思う。

●多摩市立東愛宕中学校

副校長 竹田 和彦

プログラムの全体的印象

心待ちにしていたタイ教職員の皆様を、本校駐車場にてお出迎えをさせていただきました。バスから降りていらっしやったその瞬間から、タイの先生方の礼儀正しさに感服いたしました。

対面式では、双方の教職員が緊張した面影でしたが、2名の通訳を通し親近感

が急激に高まっていったことが印象に残っています。戸惑いながらも給食を共にした甲斐があり、タイ教職員による文化授業ではタイ教職員と本校生徒との間に壁はなく、有意義で教育的な1時間となりました。

プログラム成果

ここ数年、外国の先生方にお越しいただいておりますが、それぞれのお国柄を知ることができ、特に今回のタイ教職員の礼儀正しさと教育熱心さには私たち日本の教職員も学ぶべき点が多々あったと思います。生徒もタイ教職員による文化授業を通して今後、さらにグローバルな学びの大切さを体得することができたと実感しました。

プログラムの改善に向けた助言

計画当初は、日本の保護者授業参観にありがちな日常どおりの授業展開を参観していただくより、ESDの一環としてブラッシング指導の授業展開を考えていました。日本の公教育としての日常の授業を見たいとの要望があり予定を変更しましたが、事前段階で先方が望んでいる授業を知ることができてよかったと感じると同時に、準備受入れ段階でその調整ができたことはとても有意義であったと感じます。

●教育出版株式会社

事業開発局主任 南館 伸介

プログラムの全体的印象

非常に熱心に研修を受けられていることが印象に残りました。特に質問内容と質問数の多さから日本の教科書や教育制度をより詳しく知りたいという思いが感じられました。

プログラム成果

弊社でもタイの教育および教科書制度や教科書の内容、制作方法などについて興味を持ちました。今後なんらかのかたちで役に立てることがあれば、ぜひ協力していきたいと考えております。

プログラムの改善に向けた助言

参加教職員が非常に熱心に研修を受けられていたことから、弊社としては今後とも積極的に対応していきたいと考えております。今後の研修をより充実させるために以下のような点が改善されると、より効果的な研修内容にできるかと存じます。

- ①より内容に即した具体的な教材作成の工夫点や重視している事項の変遷が伝えやすいよう参加教職員の教科をしぼる。
- ②教材制作体験、編集会議模擬体験など参加型の研修を取り入れることができるよう十分な訪問時間を確保する。
- ③より効果的な研修のために教科書作成の背景、教科書を作成する過程、実際に教科書を使用する様子、評価と改善の方法の一連の流れを通して学ぶ。

●東京藝術大学音楽学部附属

音楽高等学校

副校長 鈴木 芳明

プログラムの全体的印象

タイ教職員の皆さんが温かなお人柄で、とても良い交流ができたのではないかと考えています。通訳が2名随行されてとても良かったと思います。生徒や先生方との話し合いも熱心にされていましたし、全体的にとっても良かったです。

プログラム成果

日本人が忘れていた礼儀正しさや人間関係の温かさというものを特に感じました。皆さん、とても優しく、わけへだてなくお話をされていたのが、とても印象的でした。

プログラムの改善に向けた助言

ACCUの担当職員の方も一生懸命支えてくださりましたし、色々と相談にのってくださいましたので、特に困ったことはありませんでした。

3. 主催・実施機関

●国際連合大学
サステイナビリティ高等研究所
事務局長 古田 知美

7 日間という短いプログラムでしたが、公立・私立、芸術系等首都圏における様々な取組をされている学校や教育文化施設への訪問を通じて、タイ教職員訪問団の皆様には、日本の学校教育制度及びその現状について、多くのことを体験いただけました。私は多摩市立東愛宕中学校の訪問に随行いたしました。校長先生をはじめ教職員の皆様、教育委員会の皆様のおもてなしや、タイ語のパワーポイントをご準備くださるなどの細やかなお心遣い、交流行事に参加する生徒の歓迎や、廊下ですれ違う生徒たちの元気な挨拶などに、タイ教職員の皆様が大変感激されて、暖かい交流を深められていたことが印象的でした。今回の招へいプログラムによって、タイの教職員の皆様に日本の教育制度をご理解いただくばかりではなく、日本の学校関係者や児童生徒との交流を通じて、日本とタイの教育交流の推進に今後ともご尽力いただけることを願っています。本プログラムの実施にあたり、日本が誇る学校教育現場や教育機関をご視察いただくために、多大なご尽力を賜りました日本・タイの関係者の皆様に改めて感謝申し上げます。

●ユネスコ・アジア文化センター
事務局長 堀江 振一郎

台風 18 号が沖縄付近にあって心配する中、タイからの招へい教職員 15 名の皆さんが無事東京に到着され、嬉しいスタートでした。学校や教育機関訪問の 1 週間の日程の最後に、15 名のタイ人教員と 15 名の日本人教員のグループ教育交流会にも 1 日参加していただきました。理数系教育、部活動、キャリア教育等のテーマについて、通訳を

介したり、ときには夢中になって英語討議になったり、熱心な教育専門家交流は盛り上がった様子でした。今回の対面の交流だけに終わらせないよう、インターネットなどを使った情報の交換が、両国から提案されていました。この交流の始まりが、末長く大きく発展するよう祈ります。

●ユネスコ・アジア文化センター
人物交流部 部長 進藤 由美

今回で 2 回目となる本プログラムは、タイの中等教育教職員 14 名と教育行政職員 1 名の計 15 名を招へいしました。プログラムの構成は、タイ側からのニーズも踏まえ、ACCU 担当職員により入念に準備されたものです。国公立、私立の中等教育機関への訪問に加え、教科書や教材を制作する企業への訪問は、アンケート結果から見られるように大変好評でした。また、日本の教育現場を一通り見ていただいた後の「日タイ教育交流会」では、日本の教職員 15 名にも参加頂き、和やかな中にも日タイ双方の参加者はお互いに高い関心と教育への熱い気持ちをぶつけ合う大変よい時間であったと思います。

受け入れにご協力頂きました各教育機関の皆様、生徒の皆様、そして「日タイ教育交流会」にご参加頂いた日本の教職員の皆様に心よりお礼申し上げます。今後とも本プログラムの更なる発展へ向けて ACCU 職員一同邁進してまいりたいと存じます。

●ユネスコ・アジア文化センター
人物交流部 齋藤 盛午

第 2 回を迎える本プログラムを、昨年度に引き続き担当させていただきました。参加者選定時には、200 人近い応募があったということを聞き、驚かされましたが、来日された先生方はどの方も熱心な方ばかりで、講義であれ、学校訪問であれ、常に真剣に活動に臨むタイ教職員の姿を見て感動を覚えま

した。「タイの教職員から発信する場を持ちたい」、「日タイ教育交流会の時間が足りない」、「文化体験を通して日本についてより深く理解したい」など昨年度いただいたご意見、ご要望を反映し、より良いプログラムづくりに努めてまいりましたが、タイの先生方、訪問受入機関の皆様、交流会に参加してくださった日本の先生方にとって本プログラムが実り多きものとなったのであれば幸いに存じます。

プログラム終了から数ヶ月が経ち、タイを訪問する機会がありました。何名かの参加者と再会を果たしましたが、ある先生からは日本の学校との交流が始まることになりそうとのうれしいお知らせをいただき、ある先生からは帰国後、周りの教職員に日本で学んだことを伝えたとお言葉と共に読みきれないほど厚い報告書をいただきました。今回の訪日での成果を自国に持ち帰り、しっかりと周りに還元している先生方を見てとても嬉しく思いました。今後も参加者の皆様が両国の架け橋となり、日本とタイの友好促進に貢献して下さることを期待しております。

●ユネスコ・アジア文化センター 人物交流部 河口 枝里子

タイ教職員招へいプログラムは一昨年に引き続き、2回目の実施となりました。タイ全国からお集まりいただいた先生方は、日本の数学や科学、英語、農業など様々な教育分野に関心を寄せて訪日され、非常に熱心に質問や意見を交わされていたのが印象に残っています。特に、日本のESD（持続可能な開発のための教育）に非常に高い関心を持たれ、すでにESD活動を始められている学校もあれば、今後活用したいと考えられた先生もいらっしゃいました。バスの中では、ESDを知るタイ教職員がミニ講義をするなど、熱心な様子に私も感嘆してしまいました。

また、日タイ教育交流会で、両国の教職員に共通していた感想が、「意外にも

教育現場において同じ悩みを抱えている」ということでした。1日の交流会で、課題を解決することは難しいことは承知のうえですが、お互いの交流が続き、成果や課題を共有できるネットワークが国を越えるものになるきっかけとなること願っています。

今後も相互交流が持続し、両国の教育発展につながるプログラムづくりに努めて参ります。この度、訪問させていただいた学校そして教育関係者の方々をはじめ、ご協力いただいたみなさまに改めて感謝申し上げます。

付録

1. 実施要項
2. プログラム日程
3. 参加者リスト
4. 関係機関リスト
5. 文部科学省講義資料
6. 写真

◆付録 1. 実施要項

タイ教職員招へいプログラム
(2016 年 10 月 4 日－10 日：東京近郊)

実 施 要 項

1. 背 景

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)では、我が国とアジア太平洋地域の教職員間の交流を深め、相互理解と友好の促進に資するため、国際連合大学の委託を受け、2002 年より国際教育交流事業を実施し、日韓・日中間の相互理解促進、学校間交流に大きく貢献してきた。

2015 年からは、この国際教育交流事業の一環として、さらに多くの国の教職員との交流を図るため、文部科学省、タイ教育省の協力のもと、「タイ教職員招へいプログラム」が始まった。第 2 回となる今年度は、2016 年 10 月 4 日(火)から 10 日(月)までの 7 日間にわたりタイ王国から中等教育教職員、教育行政職員など約 15 名を本邦に招へいする。

2. 目 的

- (1) 日本の教育制度、学校教育の現状や特色ある取り組みをタイ教職員に紹介する。
- (2) 日本の教材開発や教職員研修などをタイ教職員に紹介する。
- (3) 教職員間の意見交換を通じて、両国の教育の質を高める。
- (4) 日本の文化および社会全般に対する理解を深める。
- (5) 訪問する学校などでの交流や両国教職員の交流会を通じて、両国教職員の持続的なネットワークの構築、強化に寄与する。
- (6) 両国の相互理解と友好を促進する。

3. 日 程

本プログラムは、下記の日程で実施される予定である。

日付	日程	訪問先	活動
10 月 4 日 (火)	第 1 日	東京近郊	日本到着 オリエンテーション
10 月 5 日 (水)－ 10 月 7 日 (金)	第 2－4 日	東京近郊	開会式、文部科学省講義、 学校訪問(授業見学、教員)、児童生徒との交流) 教育関連機関訪問 タイ語学習者との交流会
10 月 8 日 (土)	第 5 日	東京近郊	文化施設訪問、日本文化体験など
10 月 9 日 (日)	第 6 日	東京近郊	両国教職員による教育交流会
10 月 10 日 (月)	第 7 日	東京近郊	タイへ帰国

4. 参加者数

約 15 名

5. 参加資格

- (1) タイ王国の国民であること。
- (2) 所属する学校等からの推薦を受けた、タイ王国の中等教育教職員および教育行政職員であること。
(教育行政官及び教育専門家を含む)
- (3) プログラム参加中に得た成果を帰国後に自身の所属先、引いてはタイ王国の教育に還元する姿勢を持つもの。
- (4) プログラム参加中ならびに参加後も積極的に主に教育分野における日本との交流および国際相互理解を深める活動に取り組む姿勢を持つもの。
- (5) プログラムの全日程に参加が可能であること。

なお、参加者は、①教員経験 3 年以上のもの、②日本との学校間交流、授業交流を希望しているもの、③日本の教科書および教材開発に高い関心を持つものが望ましい。

6. 評価と報告

日本出発前(第6日)

各参加者は ACCU の用意する評価票に記入する。

帰国後

各参加者は報告書を作成し、タイ教育省を通して ACCU に提出する。

7. 渡航費等

ACCU は下記の経費を負担する。

(1) 往復航空運賃

タイ国内の指定された国際空港と、日本国内の指定された国際空港との間のエコノミークラス航空券。

(2) 宿泊と食事

プログラム期間中の宿泊(朝食含)、およびプログラム期間中の食事。

食事が提供されない場合については食費を支給する。

(3) 日本国内の移動旅費

プログラム期間中の、自由行動時以外の国内移動旅費。

※上記以外の経費については参加者が負担することとする。

8. 海外旅行傷害保険

各参加者は、プログラム期間中に起こりうる傷害、疾病等の緊急時に備えて、各自の責任において、必ず海外旅行傷害保険に加入すること。

9. 通 訳

公式プログラム期間中は原則として日本語とタイ語間の逐次通訳が行われる。

10. 申請・推薦手続

タイ教育省は、参加者を選定し、8月10日(水)までに参加者リストおよび参加者のデータシート、パスポート控えを揃えて、ACCU へ推薦することとする。

11. このプログラムに関する照会先

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

人物交流部 担当: 齋藤・河口 (部長: 進藤)

〒162-8484 東京都新宿区袋町6番地 日本出版会館

TEL: 03-3269-4498

FAX: 03-3269-4510

E-MAIL: accu-exchange_ml@accu.or.jp

◆付録 2. プログラム日程

Day 1	วันที่ 4 เดือน ตุลาคม (วันอังคาร)	10月4日(火)
	การแต่งกาย : ชุดลำลอง อาหารเช้า : เครื่องบิน อาหารเย็น : รับประทานอาหารเอง	当日の服装: カジュアル 朝食: 機内食 / 夕食: 各自
00:30	เดินทางออกจากกรุงเทพ (สนามบินสุวรรณภูมิ : NH808)	
	バンコク (スワンナプーム空港) 発 (NH808)	
08:40	เดินทางถึงโตเกียว (สนามบินนาริตะ)	
	東京 (成田空港) 着	
11:30-12:30	อาหารกลางวัน PLACE: Japanese Restaurant "Tofuro Yumemachi-Koji" 昼食 (土風炉夢町小路銀座一丁目店)	
13:00	เดินทางถึงโรงแรม	
	ホテル着	
13:15-14:00	ออเรียนเทชั่น PLACE: 2nd Floor, Ark Hotel Tokyo Ikebukuro オリエンテーション (アークホテル2階 会議室)	
14:00-14:50	การพูดคุยระหว่างครูไทย (การเตรียมตัวสำหรับการสอนในวันที่ 6 ตุลาคม) PLACE: 2nd Floor, Ark Hotel Tokyo Ikebukuro 情報共有会(10月6日の授業準備など)	
15:00	เช็คอินเข้าโรงแรม	
	ホテルチェックイン	
Day 2	วันที่ 5 เดือน ตุลาคม (วันพุธ)	10月5日(水)
	การแต่งกาย : ชุดทำงาน สิ่งของจำเป็น : แขนด์บุ๊ก* นามบัตร เครื่องรับฟังการแปล* *จะมอบให้ในช่วงออเรียนเทชั่น อาหารเช้า : โรงแรม / อาหารเย็น : รับประทานอาหารเอง	当日の服装: ビジネス 持ち物: ハンドブック*, 名刺, 通訳レシーバー* *オリエンテーションで配布します。 朝食: ホテル / 夕食: 各自
08:45	เดินทางออกจากโรงแรม	
	ホテル発	
9:45-11:20	เข้าพบคารวะทางกระทรวงศึกษาธิการ, บรรยาย	
	文部科学省表敬訪問、講義	
11:30	กระทรวงศึกษาธิการ ออกเดินทาง	
	文部科学省出発	
12:00-16:30	เยี่ยมโรงเรียนมัธยมปลายอะโอะยะมะกักขุอิน(อาหารกลางวัน)	
	青山学院高等部訪問 (昼食: 学食)	
17:15	เดินทางถึงโรงแรม	
	ホテル着	
Day 3	วันที่ 6 เดือน ตุลาคม (วันพฤหัสบดี)	10月6日(木)
	การแต่งกาย : ชุดลำลองทั้งทางการ สิ่งของจำเป็น : แขนด์บุ๊ก นามบัตร เครื่องรับฟังการแปล อาหารเช้า : โรงแรม / อาหารเย็น : รับประทานอาหารเอง	当日の服装: ビジネスカジュアル 持ち物: ハンドブック, 名刺, 通訳レシーバー 朝食: ホテル / 夕食: 各自
09:30	เดินทางออกจากโรงแรม	
	ホテル発	
11:00-16:45	เยี่ยมโรงเรียนมัธยมต้นฮิกะชิอะทะโกะ (อาหารกลางวัน)	
	多摩市立東愛宕中学校訪問 (昼食: 給食)	
18:15	เดินทางถึงโรงแรม	
	ホテル着	

Day 4	วันที่ 7 เดือน ตุลาคม (วันศุกร์)	10月7日(金)
	การแต่งกาย : ชุดลำลองกึ่งทางการ สิ่งของจำเป็น : แอ็นต์บุ๊ก นามบัตร เครื่องรับฟังการแปล* *หลังจากถึงโรงแรมจะทำการเก็บเครื่องรับฟังการแปลคืน อาหารเช้า : โรงแรม / อาหารเย็น : รับประทานเอง	当日の服装:ビジネスカジュアル 持ち物:ハンドブック、名刺、通訳レシーバー* *ホテル到着後、通訳レシーバーを回収します。 朝食:ホテル / 夕食:各自
08:30	เดินทางออกจากโรงแรม	ホテル発
9:00-11:00	เยี่ยมชมบริษัทเคียวอิชิซุปปีน	教育出版社会社訪問
11:30-15:30	เยี่ยมชมโรงเรียนดนตรีมัธยมปลายในสังกัดมหาวิทยาลัยศิลปะแห่งโตเกียว(อาหารกลางวัน)	東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校 (昼食 : 弁当)
16:00	เดินทางถึงโรงแรม	ホテル到着
16:00-18:00	การพูดคุยระหว่างครูไทย (การเตรียมการสำหรับการพรีเซนต์)	PLACE:2rd Floor, Ark Hotel Tokyo Ikebukuro 情報共有会(10月9日のための準備)
Day 5	วันที่ 8 เดือน ตุลาคม (วันเสาร์)	10月8日(土)
	การแต่งกาย : ชุดลำลอง สิ่งของจำเป็น : แอ็นต์บุ๊ก อาหารเช้า : โรงแรม / อาหารเย็น : รับประทานเอง	当日の服装:カジュアル 持ち物:ハンドブック 朝食:ホテル / 夕食:各自
08:30	เดินทางออกจากโรงแรม	ホテル出発
9:30-11:20	ลองนั่งรถคนลาก เยี่ยมชมวัดอะสะกุสะ	人力車体験・浅草散策
11:30-12:30	อาหารกลางวัน	PLACE: Tempura Restaurant "San-Sada" 昼食 (三定)
13:30	เดินทางถึงโรงแรม	ホテル到着
Day 6	วันที่ 9 เดือน ตุลาคม (วันอาทิตย์)	10月9日(日)
	การแต่งกาย : ชุดลำลองกึ่งทางการหรือชุดประจำชาติ สิ่งของจำเป็น : แอ็นต์บุ๊ก นามบัตร อาหารเช้า : โรงแรม / อาหารเย็น : งานเลี้ยงอำลา	当日の服装:ビジネスカジュアル or 伝統衣装 持ち物:ハンドブック、名刺 朝食:ホテル / 夕食:歓送レセプション
09:30	เดินทางออกจากโรงแรม	ホテル発
10:00-17:00	แลกเปลี่ยนความคิดเห็นด้านการศึกษาของไทยและญี่ปุ่น	PLACE: Conference Room, 4th Floor, Japan Publisher Building 日タイ教育交流会 (日本出版会館4階 会議室)
17:30-19:30	งานเลี้ยงอำลา	PLACE:"Kiku", 2nd Floor, Japan Publisher Club 歓送レセプション (日本出版クラブ2F「きく」)
20:00	เดินทางถึงโรงแรม	ホテル着
Day 7	วันที่ 10 เดือน ตุลาคม (วันจันทร์)	10月10日(月)
	การแต่งกาย : ชุดลำลอง อาหารเช้า : โรงแรม / อาหารกลางวัน : เครื่องบิน	当日の服装:カジュアル 朝食:ホテル / 昼食:機内食
08:00	เดินทางออกจากโรงแรม	ホテル発
11:05	โตเกียว (เดินทางออกจากสะพานะตะ : NH849)	東京 (羽田発) 発 (NH849)
15:40	เดินทางถึงกรุงเทพ (สนามบินสุวรรณภูมิ)	バンコク (スワンナプーム) 着

◆付録 3. 参加者リスト

タイ訪問団

No	氏名	性別	学校名	役職	担当教科	都市／県
◎T-1 団長	ユパー・ポーンセート Yupa Pomseth	女	カンタンピッタヤーコーン・スクール Kantangpittayakorn School	校長	－	トラン
○T-2 副団長	パトムボン・スバルート Pathompong Supalert	男	ジラサートウィッタヤー・スクール Jirasartwittaya School	学校部長	社会	アユタヤ
●T-3 セクレタリー	ウィライラック・パドゥンキッティマーン Wilailuk Padungkittimal	女	タイ教育省 次官事務局 Office of Permanent Secretary, Ministry of Education	国際出版 情報局部長	－	バンコク
T-4	パッチャリン・サグアンポンパイロート Patcharin Sa-nguanpholpairoj	女	チュラロンコーン大学付属中等学校 Chulalongkorn University Demonstration Secondary School	助教授	芸術	バンコク
T-5	サラワン・マンターウォーンウォン Srawan Manthavornwong	女	スワングラーブ・ウィッタヤーライ・スクール Suankularb Wittayalai School	教員	英語	バンコク
T-6	ナンタワン・ジッターンクーン Nuntawan Jittangkun	女	クローンカルンラートランサン・スクール Klongklungratransan School	教員	タイ歴史	カンペーンペット
T-7	ナッパワン・ジャイジョーン Noppawan Jaijong	女	ノンカーオコーウィピッタヤーコム・スクール Nongkhaokowitpittayakorn School	教員	家庭科	カンチャナブリ
T-8	ウボン・スバボウォンラット Ubon Subhabornwornrat	女	ノンシンウィッタヤーコム・スクール Nonghinwittayakorn School	教員	英語	ルーイ
T-9	スモンワン・チャンタカーン Sumonwan Chanthakan	女	サーマッキウィッタヤーコム・スクール Samakhiwittayakhom school	教員	英語	チェンラーイ
T-10	パッタラポーン・ブーイクリン Pattaraporn Phociklin	女	タークリープラチャーサン・スクール Takhliprachasan School	教員	科学	ナコーンサワン
T-11	ワンラヤー・ブンアーカート Wallaya Boonarkas	女	マカムサンズーン・スクール Makhansansorn School	教員	数学	チャンタブリー
T-12	プリーチャーコーン・バーチャナ Preechakorn Phachana	男	プーキーアオ・スクール Phukhieo School	教員	数学	チャイヤブーム
T-13	キッジャカーン・キッティガー Kitjagam Kitiga	男	バーンカートウィッタヤーコム・スクール Bankadwittayakorn School	教員	数学	チェンマイ
T-14	ナターユ・ティープジャン Nathayoo Teebchan	男	プッサピッタヤーコム・スクール Pudsapittayakorn School	教員	数学	ナコーンラーチャーシーマー
T-15	ニフィラダーオ・ニレ Nifirador Nilach	女	パッターニー・インダストリアル・アンド・コミュニティ・エデュケーション・カレッジ Pattani Industrial and Community Education College	教員	キャリア英語	パッターニー

日タイ教育交流会・参加日本教職員

No	氏名	性別	学校名	役職	担当教科	都市／県
J-1	藤本 佳昭	男	神戸大学附属中等教育学校	教諭	保健体育	兵庫
J-2	岩見 理華	女	神戸大学附属中等教育学校	教諭	英語	兵庫
J-3	河邊 友美	女	岐阜聖徳学園高等学校	教諭	国語	岐阜
J-4	本川 梨英	女	市川高校	教諭	社会科	千葉
J-5	千田 理愛	女	宮城県立支援学校女川高等学園	福祉コースチーフ 進路指導副主任	福祉	宮城
J-6	丸王 祐子	女	清心中学校・清心女子高等学校	教諭	地歴科(世界史)	岡山
J-7	大野 佳男	男	さいたま市立大谷場中学校	学年主任	音楽	埼玉
J-8	関根 朱美	女	さいたま市立木崎中学校	教諭	音楽	埼玉
J-9	橋岡 源九郎	男	清心女子高等学校	教諭	数学	岡山
J-10	小山 達也	男	恵泉女学園中学・高等学校	教諭	数学・情報	東京
J-11	柴崎 裕子	女	大田区立大森第六中学校	指導教諭	理科	東京
J-12	菊 園子	女	さいたま市立木崎中学校	教諭	英語	埼玉
J-13	町田 恵理子	女	大田区立大森第六中学校	教諭	英語	東京
J-14	宮澤 まどか	女	長野県中野西高等学校	教諭	英語	長野
J-15	若海 由美	女	埼玉県立熊谷西高等学校	教諭	英語	埼玉

◆付録 4. 関係機関リスト

United Nations University (UNU) ／国際連合大学

5-53-70 Jingumae Shibuya-ku, Tokyo 150-8925

〒150-8925 東京都渋谷区神宮前 5-53-70

Tel:03-5467-1212 Fax:+81-3-3499-2828 URL: <http://unu.edu/>

Ph.D. TAKEMOTO Kazuhiko

Director, UNU-Institute for the Advanced Study of Sustainability (UNU-IAS)

竹本 和彦

サステイナビリティ高等研究所 所長

Ms. FURUTA Tomomi

Administrative Director, UNU-IAS

古田 知美

サステイナビリティ高等研究所 事務局長

Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) ／文部科学省

3-2-2 Kasumigaseki, Chiyoda-ku, Tokyo 100-8959

〒100-8959 東京都千代田区霞ヶ関 3-2-2

TEL: 03-5253-4111 URL: <http://www.mext.go.jp>

Mr. SAGISAKA Katsuhisa

Director-General for International Affairs

匂坂 克久

大臣官房国際課 課長

Lecture 1: Mr. KITANO Makoto

Deputy Director,

Elementary and Secondary Education Planning Division,

Elementary and Secondary Education Bureau

北野 允

初等中等教育局初等中等教育企画課 課長補佐

Lecture 2: Mr. SHIMODA Chikara

Deputy Director,

Office for Supporting Regional and School Education,

Social Education Division, Lifelong Learning Policy Bureau

下田 力

生涯学習政策局社会教育課地域・学校支援推進室 室長補佐

Royal Thai Embassy ／タイ王国大使館

3-14-6 Kami-Osaki, Shinagawa-ku, Tokyo 141-0021

〒141-0021 東京都品川区上大崎 3-14-6

TEL: 03-5424-0652 Fax: +81-3-5424-0658

URL: <http://www.thaiembassy.jp/rte1/>

School Visit Hosts

学校訪問でご協力いただいた方々

Aoyama Gakuin Senior High School / 青山学院高等部

4-4-25 Shibuya-ku, Tokyo 150-0002

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 4-4-25

TEL: 03-3409-3880 <http://www.agh.aoyama.ed.jp/>

Mr. NISHIYAMA Ryoza

Principal

西川 良三

高等部長

Mr. FUJII Tetsuya

International Exchange Committee

藤井 徹也

国際交流委員

Higashiatago Junior High School / 多摩市立東愛宕中学校

1-52 Atago, Tama-City, Tokyo 206-0041

〒206-0041 東京都多摩市愛宕 1-52

TEL: 042-374-9781 <http://www.tama.ed.jp/atagochu>

Mr. CHIBA Masanori

Principal

千葉 正法

校長

Mr. TAKEDA Kazuhiko

Vice Principal

竹田 和彦

副校長

KYOIKU-SHUPPAN.Co.,Ltd. / 教育出版株式会社

2-10 Kanda-Jinbocho, Chiyoda-ku, Tokyo 101-0051

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-10

TEL: 03-3238-6811 <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/index.html>

Mr. KOBAYASHI Kazumitsu

President

小林 一光

代表取締役社長

Mr. MINAMIDATE Shinsuke

Textbook Editing Adviser

南館 伸介

主任

The Music High School Attached to The Faculty of Music,

Tokyo University of the Arts / 東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校

Ueno Park 12-8, Daito Ward, Tokyo 110-8714

〒050-5525-2406 東京都台東区上野公園 12-8

TEL: 03-3402-7526 <http://geiko.geidai.ac.jp/>

Ms. TSUKAHARA Yasuko

Principal

塚原 康子

校長

Mr. SUZUKI Yoshiaki

Vice Principal

鈴木 芳明

副校長

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU) / 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

Japan Publishers Building, 6 Fukuromachi, Shinjuku-ku, Tokyo 162-8484

〒162-8484 東京都新宿区袋町 6 日本出版会館

TEL: 03-3269-4498

Email: accu-exchange_ml@accu.or.jp URL: <http://www.accu.or.jp>

Mr. TAMURA Tetsuo

Director-General

田村 哲夫

理事長

Mr. HORIE Shinichiro

Executive Director, Secretary-General

堀江 振一郎

業務執行理事・事務局長

Mr. NINOMIYA Masakazu

Director, General Affairs Department

二ノ宮 正和

総務部長

Ms. SHINDO Yumi

Director, International Exchange Department

進藤 由美

人物交流部長

Mr. SAITO Seigo

Programme Officer (the person in charge),

International Exchange Department

齋藤 盛午

人物交流部 事務専門員（本プログラム担当）

Ms. KAWAGUCHI Eriko

Programme Officer (the person in charge),

International Exchange Department

河口 枝里子

人物交流部 事務専門員（本プログラム担当）

Ms. ARIZONO Yoshiko

Programme Officer, International Exchange Department

有薗 佳子

人物交流部 事務専門員

Ms. TAKAMATSU Ayano

Programme Officer, International Exchange Department

高松 彩乃

人物交流部 事務専門員

Interpreters / 通訳

Ms. NODA Yuwaree

野田 ユワリー

Ms. YOSHIKAWA Yuka

吉川 由佳

Ms. KOISHI Siriwan

小石 シリワン

文部科学省初等中等教育局
北野 允


文部科学省
独立行政法人
国立研究開発機関

		幼稚園	小学校	中学校	高等学校	中等教育 学校	特別支援 学校
学校数	計	12,905	20,852	10,557	4,963	51	1,036
(校)	国立	49	72	73	15	4	45
	公立	4,714	20,596	9,707	3,829	30	1,034
	私立	8,142	222	777	1,220	17	14
児童生徒数	計	1,557,461	6,006,006	2,504,334	3,234,019	31,499	126,615
(人)	国立	5,614	41,057	31,220	8,613	3,160	3,033
	公立	284,653	6,481,995	3,227,314	2,286,385	20,424	121,791
	私立	1,267,284	77,542	245,300	1,059,021	7,915	80,891
教員数	計	111,059	416,476	263,832	236,306	2,432	79,288
(人)	国立	344	1,839	1,828	575	214	1,502
	公立	23,360	409,758	237,062	174,363	1,520	77,470
	私立	87,355	4,899	15,122	10,368	698	29,316

出處：空知川水系「平成28年度空知川基本整備報告書」

[illegible][illegible]

- 教育委員会。首長から独立した行政委員会として全ての都道府県及び市町村等に設置。
- 教育委員会は、教育長が主宰する会議で、教育行政における重要事項や基本方針を決定し、それに基づいて教育長が具体的な事務を執行。

- 教育長及び教育委員は、首長が、議会の同意を得て、任命。
- 教育長は、常勤で、教育委員会を代表。任期は3年で、再任可。
- 教育委員は、非常勤で、原則4人。任期は4年で、再任可。

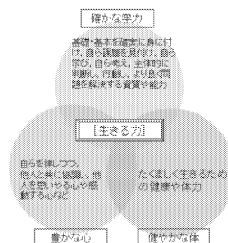
- ① **政治的中立性の確保**
教育は、その内容が中立公正であることが極めて重要。個人間の価値判断や特定の政策の影響から中立性を確保することが必要。
- ② **継続した教育性の確保**
教育は、子供の健全な成長発達のため、学習期間を通して一貫した方針の下、定型的に行われることが必要。
- ③ **地域性の尊重と反映**
教育は、地域住民によって関心が高い行政分野であり、専門家のみが担うのではなく、広く地域住民の参加が促されて行われることが必要。

全国のどの地域で教育を受けても、一定の水準の教育を受けられるようにするため、文部科学省は、学校教育法等に基づき、各学校で教育課程(カリキュラム)を編成する際の基準として「学習指導要領」を定めている。

「学習指導要領」では、小学校、中学校、高等学校等ごとに、それぞれの教科等の目標や大まかな教育内容を定めている。

また、これとは別に、学校教育法施行規則で、例えば小・中学校の教科等の年間の標準授業時数等を定めている。

各学校では、この「学習指導要領」や年間の標準授業時数等を踏まえ、地域や学校の実態に応じて、教育課程(カリキュラム)を編成している。



【免辭狀主義】

教員は、教育職員免許法により授与される各相当の免許状を有する者でなければならない。

【教員養成・採用・研修等の各段階を通じた教員の資質向上】

- 大学における養成が原則
- 教職課程の認定を受けた学科等において、教科に関する科目、教職に関する科目などを修得することにより、採用当初から学級や教科を担当し、教科指導、生徒指導等を遂行するために必要な養育能力を養成

- 鉄道沿線・指定都市教育委員会等において採用選考試験を実施
- 応募白熱、物望確の…関心推進

- 多面的な人物評価の…徹底の推進
 - ・面接試験・実技試験の重視
 - ・様々な社会体験等の評価

- 指導が不適切な教員に対する人事管理システムの適切な運用
- 教員評価システム
- 優秀教員表彰

- 都道府県教育委員会等における研修
 - ・新任研修等 ・ 1.0年経験者研修 等
- 国(教員研修センター)における研修
 - ・各地域において中心的な役割を担う教職員に対する学校運営研修
 - ・校長の進修研修等

- 教員は現職時代に最新の知識技能を身につけることで教員が自由と誇りを持って教壇に立ち、社会の尊敬と信頼を獲得していく
- 免許状に10年の有効期間

○ 義務教育費国庫負担制度

- 憲法の要請に基づき、義務教育の根幹（機会均等、水準確保、無償制）を国が責任をもって支える制度。
- 市町村が小中学校を設置・運営。
- 都道府県が教職員を任命し、給与を負担。
- 国は教職員給与費の1/3を負担。



○ 教員の給与

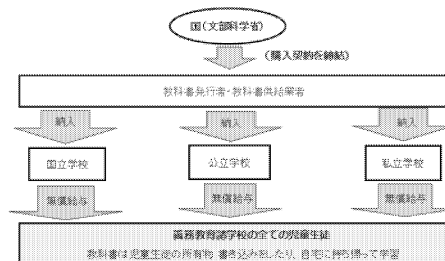
- 教員に優れた人材を確保し、もって義務教育水準の維持向上を図ることを目的として、教員の給与を一般の公務員より優遇することを法律で定めている。

(学校教育の水準の維持向上のための義務教育諸学校の教職員の人材確保に関する特別措置法)

5

【教科書無償給与制度】

- ・我が国においては、教科書の採択の重要性から、その使用義務が法律で定められている。
- ・憲法第26条の義務教育推進の精神をより広く実現するものとして、授業料の平価視に準じ、教科書が無償給与される。
- ・無償給与の対象は国・公・私立の義務教育諸学校の正課学生徒。その使用する全教科の教科書。
- ・平成28年度予算には、義務教育教科書購入費として、約411億円が計上。



○ 教科書制度

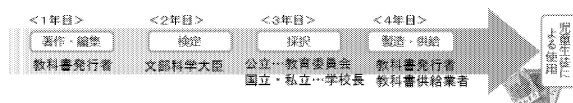
【教科書とは】

全ての児童生徒の学校における授業や家庭における学習活動において、重要な役割を担っている主たる教材

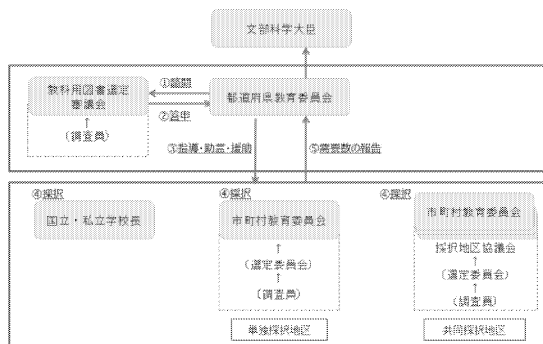
<教科書の法的位置付け>

- ①各学校において使用しなければならない = 「使用義務」
- ②文部科学大臣による検定を経る必要がある = 「質の確保」
- ③国から発行者に対する発行指示、定価の認可等 = 「安定供給の確保」等

【教科書が使用されるまで】



【教科書採択の流れ】 ※義務教育段階の場合

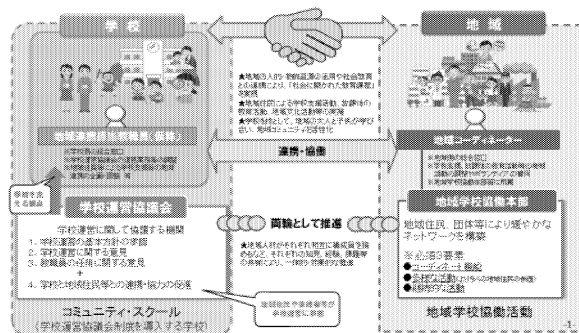


地域と学校の連携協働の推進について

生涯学習政策局
社会教育課地域・学校支援推進室
室長補佐 下田 力

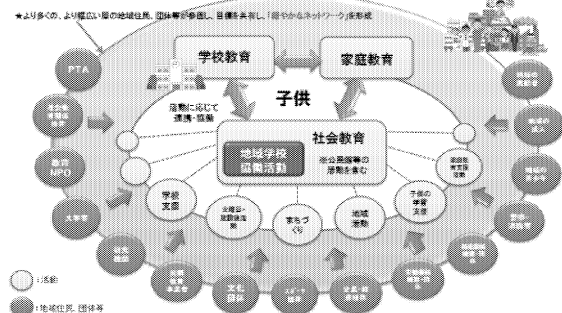
学校と地域の効果的な連携・協働と推進体制（イメージ）

～パートナーシップの構築による新しい時代の教育、地方創生の実現～

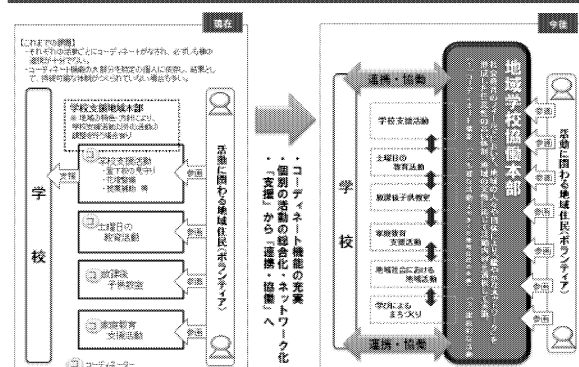


地域全体で未来を担う子供たちの成長を支える仕組み（活動概念図）

- ① 次代を担う子供たちに、よりよい未来を築くための力を育み、地域社会に貢献させる。
- ② 従来の地域関係だけでなく、新たなつながりによる地域の教育力の向上・充実、地域課題の解決に向けた連携・協働につなぐ。
- ③ 地域社会の持続可能性の向上。

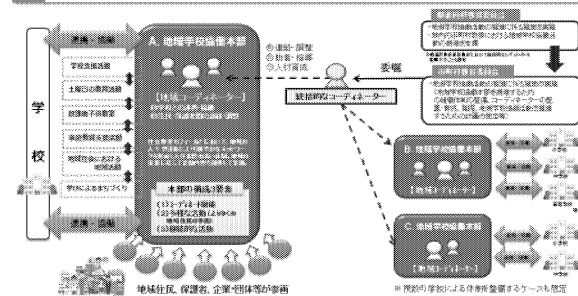


今後の地域における学校との協働体制（地域学校協議本部）の在り方～目指すべきイメージ～

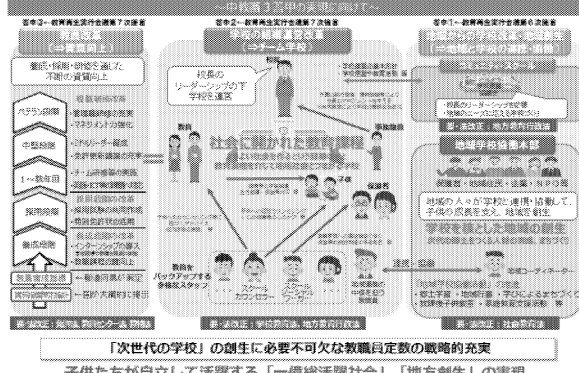


地域学校協議活動を推進するための体制（イメージ）

- 地域と学校の連携・協働を、地域全体で未来を担う子供たちの成長を支える仕組みとして推進
- 従来の地域関係だけでなく、新たなつながりによる地域の教育力の向上・充実、地域課題の解決に向けた連携・協働につなぐ
- 地域社会の持続可能性の向上



「次世代の学校・地域」創生プラン



◆付録 6. 写真（プログラムの様子）



10月4日 オリエンテーション

熱心に説明を聞くタイ教職員



10月5日 文部科学省表敬訪問

大臣官房国際課の匂坂克久課長（前列右から2番目）
を囲んで



10月5日 青山学院高等部

昼食交流をする両国の教職員



10月5日 青山学院高等部

タイの生徒とビデオチャット交流



10月6日 多摩市立東愛宕中学校

ラムウォン（タイの盆踊り）を生徒に教える訪問団



10月6日 多摩市立東愛宕中学校

生徒との給食交流



10月7日 東京藝術大学音楽部付属音楽高等学校
同校生徒との交流



10月8日 浅草観光
雷門の前での記念撮影



10月9日 日タイ教育交流会
学校自慢の写真を用いて互いに自己紹介



10月9日 日タイ教育交流会
タイと日本の教育について話し合う様子



10月9日 歓送レセプション
日本教職員との楽しい歓談のひとつ



10月9日 歓送レセプション
日本教職員による歌の披露

●国際連合大学 2016-2017 年国際教育交流事業●

タイ教職員招へいプログラム

実施報告書

2017 年 3 月

編集・発行

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

〒162-8484

東京都新宿区袋町 6 番地 日本出版会館

電話 (03) 3269-4498

Email accu-exchange_ml@accu.or.jp

URL <http://www.accu.or.jp>

Printed in Japan by WACO Inc. [100]

©2017 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)